

# 琉球大学学術リポジトリ

## ノート：スミス蔵書 著者略傳資料 4

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2018-04-16 キーワード (Ja): 矢内原忠雄, スミス／帝国主義 キーワード (En): Yanaihara Tadao 作成者: 矢内原, 忠雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/38449">http://hdl.handle.net/20.500.12000/38449</a>

# 矢内原忠雄文庫

史料名	スミス蔵書 著者略傳資料 4
封筒番号	583
原文所蔵者	琉球大学附属図書館
撮影年月日	平成 17 年 11 月 28 日
撮影者	富士写真フイルム 株式会社
備考	

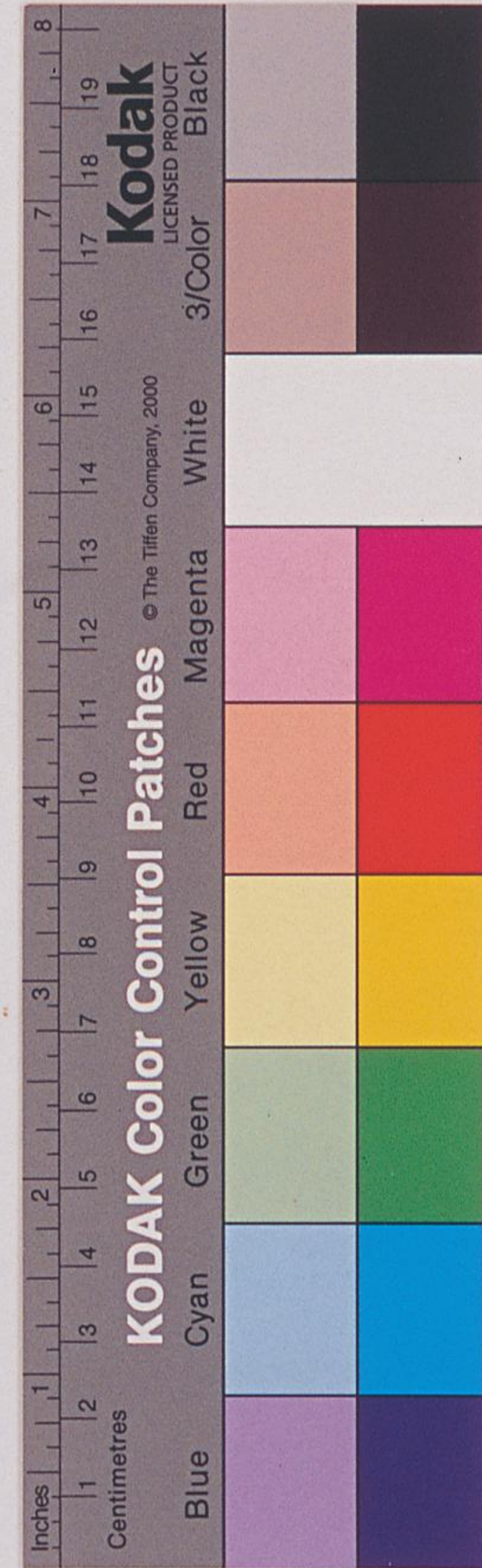
# 矢内原忠雄文庫

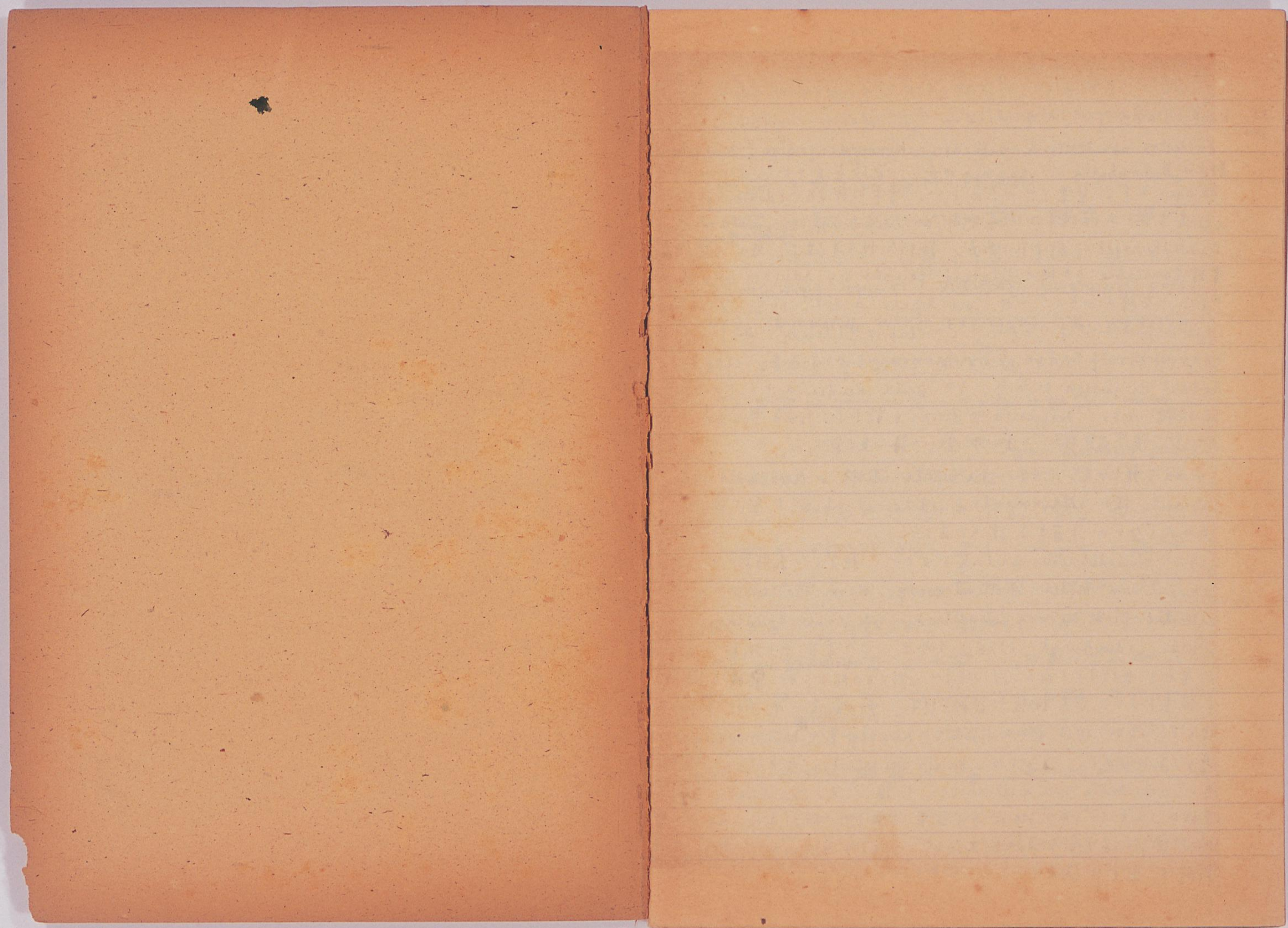
封筒番号 : 583

史料名	スミス蔵書 著者略傳資料 4
資料形態	B5版ノート
枚数	32+25
頁数	114
縦 (cm)	25.7
横 (cm)	18.2
厚さ (cm)	
書誌的事項	スミス/帝国主義 挟み込みノート、25枚。表紙が取れている。  今泉分類記号 : Y

説明  
ターゲット

この原本  
は、破損の  
まま撮影し  
ます。





55. Herd, David, 1732 - 1810.

collector of Scottish ballads. Kincardineshire, Mary-kirk  
教区の Balmakelley の farmer の子。学校を去り a country  
lawyer の下で習業してゐたらしい。青年時代より Edinburgh に出  
clerk となり。晩年には長い間、an Edinburgh accountant の  
David Russell に雇はれてゐた。静かな独身生活で、熱心に勉強し、  
書籍 Constable その他の literary friends の adviser と見做ら  
された。交際がひろく、一冊 'Sir Scrape' の著者。川変りの Cape  
Club の president ともなつた。この club は literary 23 名と  
convivial 2 名あり、その名高い members 56 名を有した。1772 年には  
Robert Fergusson が入会、その 'Auld Reikie' の中でこの club の  
記述がある。Fergusson や Burns も訪れた。John Dowie's tav-  
ern で、彼は友人等としばしば会し、語り且飲んだ。

Herd を親しく知つてゐた Sir Walter Scott と Archibald Constable は、彼の attainments と editorial skill と高く評価し、彼の人のとなり実直さを稱へてゐる。

多くの miscellaneous writing があるが、独立した出版物は、the  
'Ancient and Modern Scottish Songs, Heroic Ballads, &c.,  
collected from Memory, Tradition, and Ancient Authors,'  
2 vols., Edinburgh, 1776, のみで、この書は、その以前 (1769 年)  
に匿名で発行されてゐる (1 vol.)。1776 年の版は、その (collection)  
と識者によつて忽ち価値を認められた。Pinker-ton に於て及々の批評  
評があるが、他は直ちに Herd が Ramsay 其他、以前の editors に  
優ることを認めた。Scott は 'Border Minstrelsy' の中でこの collection  
を 'respectable and well-chosen' と稱へ、又 Chambers, Aytoun  
其他の editors も Scott に全く同意してゐる。1791 年に、Herd の監  
修を經ない不完全な再版が出たが、1869 年 Glasgow で発行された  
新版は、完全に満足すべきものである。(D.N.B.)

Herd の著作の多くは、独立した出版物として  
Robert Fergusson 其他の  
は、文藝的、詩的、同時に陽気な歡樂の  
交際が、一冊 'Sir Scrape' の著者  
の友人等と相談相手として持たされた。  
熱心に勉強し、書籍 Constable 其他の文藝  
に雇はれてゐた。静かな独身生活を送つ  
と、晩年には長年同僚、計理士、Russell  
の友人等、青年時代の工場の下で習業  
字放ち出で、地方の書籍士の下で習業  
スコットランドの歴史の蒐集者。  
Herd の著作の多くは、独立した出版物として  
Robert Fergusson 其他の  
は、文藝的、詩的、同時に陽気な歡樂の  
交際が、一冊 'Sir Scrape' の著者  
の友人等と相談相手として持たされた。  
熱心に勉強し、書籍 Constable 其他の文藝  
に雇はれてゐた。静かな独身生活を送つ  
と、晩年には長年同僚、計理士、Russell  
の友人等、青年時代の工場の下で習業  
字放ち出で、地方の書籍士の下で習業  
スコットランドの歴史の蒐集者。

55. Herd, David, 1732 - 1810.

collector of Scottish Ballads. Kincardineshire, Mary-kirk  
教区の Balmakally の farmer の子。学校を去り a country  
lawyer の下で習業してゐたらしい。青年時代より Edinburgh に出、  
clerk をつとめ。晩年には長い間、an Edinburgh accountant の  
David Russell に雇はれてゐた。静かな独身生活で、熱心に勉強し、  
詩人 Constable その他の literary friends から adviser として頼りに  
された。交際もひろく、一時 'Sir Scrape' の名で、川変りな Cape  
Club の president をつとめた。この club は literary であると同時に  
convivial であり、女の名高い members をつとめた。1772 年には  
Robert Fergusson が入会、その 'Auld Reikie' の中でこの club の  
記述がある。Fergusson や Burns も訪れた John Dowie's tav-  
ern で、彼は友人等としばしば会し、語り且飲んだ。

Herd を親しく知つてゐた Sir Walter Scott と Archibald Constable は、彼の attainments と editorial skill を高く評価し、  
彼の人となりの実直さを稱へてゐる。

多くの miscellaneous writing があるが、独立した出版物は、the  
'Ancient and Modern Scottish Songs, Heroic Ballads, &c.,  
collected from Memory, Tradition, and Ancient Authors,'  
2 vols., Edinburgh, 1776, のみで、この書は <sup>(collection)</sup> その以前 (1769 年)  
に匿名で発行されてゐる (1 vol.) 1776 年の版は、その学識と眼識  
と誠意によって忽ち価値を認められた。Pinkerton はその反響の批評  
をしてゐるが、彼は直ちに Herd が Ramsay 其他 <sup>以前</sup> の editors に  
優ることを認めた。Scott は 'Border Minstrelsy' の中でこの collection  
を 'respectable and well-chosen' と稱へ、又、Chambers, Aytoun  
其他の editors も Scott に全く同意してゐる。1791 年に、Herd の監  
修を經ない不完全な再版が出たが、1869 年 Glasgow で発行された  
新版は、完全な満足すべきものである。(D.N.B.)

「古今スコットランド歌謡、英雄バラッドその他。人々の  
記憶、傳説亦古代の作家達より蒐む」

ハート・フット  
 スコットランド・フットの蒐集者。  
 学校を出てから地方の<sup>書士</sup>の下で習事  
 して来た。青年時代から<sup>clerk</sup>書記  
 として、晩年には長らく<sup>accountant</sup>会計士 D. Russell  
 に雇はれて来た。静かな独身の生活を送り  
 熱心に勉強し、書籍 Constable などの、文学  
 の友人達から相談相手として呼ばれた。  
 交際もひろく、一村 'Sir Scrape' の名で同  
 名で Cape Club の会長もつて来た。そのほか  
 は文学的であると同時に陽気な音楽家でもあり、  
 Robert Ferguson などの<sup>他</sup>名もつて来た。  
 数々の作品がある。独立した出版物は the  
 'Ancient and Modern Scottish Songs, Heroic  
 Ballads, &c., collected from Memory, Tradition,  
 and Ancient Authors' 2 vols. Edinburgh, 1776,  
 (その以前 1769 年に匿名で発行) の外には、  
 字彙、眼録、歌集に上つて来た。そのほか、  
 Ramsay 其他彼以前の編者にな  
 るのを認められた。Sir Walter Scott は 'Border  
 minstrelsy' の外にも、精進士など五巻の集  
 巻 (Chambers, Aytoun などの編者) にも  
 名を添へた。

挿入文書



帝國主義研究  
——  
略歴 明二六生 東大社學部卒  
現職 東大經濟學部教授  
著者 植民及殖民政策  
南洋群島の研究  
帝國主義研究  
日本の協力を説く者

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
昭和二十四年六月一日 第二刷發行  
定價二百五十圓  
著者 矢内原忠雄  
發行者、増永要吉  
東京都千代田區錦田三丁目二  
印刷者 保科清春  
東京都千代田區九段二丁目一  
發行所 東京都千代田區  
錦田三丁目二 會社 白晝書院  
電話九段四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・洋川製本

挿入文書

56, 57. Hobbes, Thomas, 1588—1679.

英国の哲学者。Oxford卒業後、貴族の家庭教師として三度欧州大陸を旅行し、Galileo, Gassendi, Mersenne等に遇った。字向上 Bacon からではなく Galileo から直接に買入ところあったが、Bacon と同じく字向の目的が實用にあることを説き、経験論の視点に立つてこれに数  
字的な方法を交へ、哲学を物理論、人間論、国家論に分けた。認識論に於ては徹底的な唯物論者で、思维も概念も事物に符合せし  
ただ名目たるに止まると説いた。政治論では(主として Leviathan に於て)自然の状態に於ては本性主義的な人間は常に戦争の  
状態にあり、国家は不安を除くために約束によって強固な国家政府を必  
要とするを論じた。彼の学説は近代物理学の唯物論、感覚論、联想  
心理学、功利主義倫理学及び実証主義社会学に影響を與へ、  
無神論及び自由思想には強力な支持となり、一般社会にとっては、  
正統主義に対する最も危険な思想と思はれた。同時におこなった散文  
家であり、Thucydides (1629), Iliad 及び Odyssey (1676) 等の  
翻訳がある。主著は De Cive (1642, 英訳 Philosophical Rudiments concerning Government and Society, 1651), De Corpore Politico, or Elements of Law (1650), 及び上掲の Leviathan (1651) である。(英米文学辞典)

58. Huggan, John.

1771年 エゲンバラ大学医学部を卒業。その時の  
卒業論文が「人間の血液に刺絡の実施及濫用につ  
いて」である。その他の業績については何らの記録  
もなし。恐らく普通の医者として生涯を終へた人と思  
はれる。(イングランドの生まれらしい。)

(於エゲンバラ大学図書館、卒業生のファイルによ  
り調べ)

59. Hume, David, of Godscroft, 1560? — 1630?

controversialist, historian, and poet. Berwickshire の Wedderburn 第七代男爵 Sir David Hume の第一子。Dunbar public school を経て St. Andrews University に学び、次いで大陸に渡つたらしい。France から Geneva に赴き、Italy に行つたと1602年の病気で呼ばれた。1583年には、親類の Archibald Douglas (eighth earl of Angus) の private secretary としてゐた。Angus は Ruthven lords の James の信託を失つて以来 命せらるゝ Scotland 北部に留まつてゐた。Ruthven party の流寓中、Hume は London に在り、Angus とその cause の爲に盡力してゐた。1585年 Ruthven lords が Scotland に歸つてから、1588年 Angus が死ぬまで、Hume は princes に対する忠誠を説いた一連の letters をもつて彼の patron の政策を支援した。(2巻の序文は the 'History of the Houses of Douglas and Angus' に収められてゐる)。Rev. John Craig (1512? — 1600) による同主題の説教を論じた。'Conference betwixt the Earle of Angus and Mr. David Hume' は、Calderwood の 'History of the Kirk of Scotland' の中に収められてゐる。1593年には再びフランスに渡つたらしい。French tracts を著し、又、Latin works を Paris で発行するなど、France と関係が深かつた事と思はせる。

その後、所有地 Godscroft (Gowkescroft in Berwickshire) の literature の研究に耽つた。1605年、Robert Pont (a clergyman) の著書から示唆を受けて、論文 'De Unione Insulae Britanniae' を書いた。第一部のみ発行され、('Tractatus I.' London, 1605)。第二部は Archibald and Wodrow の collections に収められてゐる。episcopacy と presbytery の relative values に就いて、1608—11年に Law (bishop of Orkney, afterwards archbishop of Glasgow) と、次いで 1613年、Cowper (bishop of Galloway) と激烈に論争した。

controversialist (of Godscroft) 論争家且詩人。 Berwickshire の Wedderburn 第七代男爵の第一子。 Dunbar public school を経て St. Andrews University に学び、次いで大陸に渡つたらしい。 France から Geneva に赴き、 Italy に行つたと1602年の病気で呼ばれた。 1583年には、親類の Archibald Douglas (eighth earl of Angus) の private secretary としてゐた。 Angus は Ruthven lords の James の信託を失つて以来 命せらるゝ Scotland 北部に留まつてゐた。 Ruthven party の流寓中、 Hume は London に在り、 Angus とその cause の爲に盡力してゐた。 1585年 Ruthven lords が Scotland に歸つてから、 1588年 Angus が死ぬまで、 Hume は princes に対する忠誠を説いた一連の letters をもつて彼の patron の政策を支援した。(2巻の序文は the 'History of the Houses of Douglas and Angus' に収められてゐる)。 Rev. John Craig (1512? — 1600) による同主題の説教を論じた。 'Conference betwixt the Earle of Angus and Mr. David Hume' は、 Calderwood の 'History of the Kirk of Scotland' の中に収められてゐる。 1593年には再びフランスに渡つたらしい。 French tracts を著し、 又、 Latin works を Paris で発行するなど、 France と関係が深かつた事と思はせる。

59. Hume, David, of Godscroft, 1560? — 1630?

controversialist, historian, and poet. Berwickshire の Wedderburn 第七代男爵 Sir David Hume の第一子。Dunbar public school を経て St. Andrews University に学び、次いで大陸に渡つたらしい。France から Geneva に赴き、Italy に行つたとする。兄の病気で休学した。1583年には、親類の Archibald Douglas (eighth earl of Angus) の private secretary となつてゐた。Angus は、Ruthven lords が James の信託を失つて以来 命ぜられて Scotland 北部に留まつてゐた。Ruthven party の流亡中、Hume は London に在り、Angus とその cause の爲に盡力してゐた。1585年 Ruthven lords が Scotland に歸つてから、1588年 Angus が死ぬまで、Hume は princes に対する忠誠を説いた一連の letters をもつて彼の patron の政策を支援した。(2年分は the 'History of the Houses of Douglas and Angus' に収められてゐる)。Rev. John Craig (1512? — 1600) による同じ主題の説教を論じた。'Conference betwixt the Earle of Angus and Mr. David Hume' は、Calderwood の 'History of the Kirk of Scotland' の中に収められてゐる。1593年には再びフランスに渡つたらしい。French tracts を著し、又、Latin works を Paris で發行するなど、France と関係が深かつた事と思はせる。

その後、所有地 Godscroft (Gowkscroft in Berwickshire) に literature の研究に耽つた。1605年、Robert Pont (a clergyman) の著書から示唆を受けて、論文 'De Unione Insulae Britannicae' を書いた。第一部のみ發行され、('Tractatus I.' London, 1605)。第二部は Archibald and Wodrow の collections に収められてゐる。episcopacy と presbytery の relative values に就いて、1608—11年に Law (bishop of Orkney, afterwards archbishop of Glasgow) と、次いで 1613年、Cowper (bishop of Galloway) と 激烈且 朝野に論争した。

「ブリテン島の連合について」

D. 1-4. Godscroft (of Godscroft)

controversialist

論者、作家且詩人。 Berwickshire の Wedderburn 第十代男爵の孫に於て Dunbar の詩人として知らる。 St. Andrews 大學に於て法律を學び、大陸に渡つた。 1583 年に父の病を以て呼床に於て。 1583 年には親類の第六代 Angus 伯 Archibald Douglas の秘書として居た。 Ruthven 伯の流罪中スコットランドに在つて Angus の孫の娘と結婚し、1585 年 Ruthven 伯の貴族生活からスコットランドに歸つた。 1588 年 Angus の死後、その孫を以てその故郷を去つた。 1593 年には再びスコットランドに歸つた。 1593 年 詩を論じた著書。 又その著書として發行された。 1593 年 詩の著書として發行された。

その後は所居地 Godscroft の文藝的研究に耽つた。 1605 年 著書 'De Unione Insulae Britanniae' を著した。 episcopacy 及び presbyterianism の論議に於て 1601-11 年に Orkney の Law の論議 1611 年 Galloway の

挿入文書

D. 1-4 2

1611 年 Couper の著書且勅諭に論じた。 'History of the House of Wedderburn, written by a son of the family, in the year 1611' 第十代男爵 Wedderburn 伯の孫 David に於て著者自身に及ぶ。 興味深い、巧妙な筆鋒を以て。 1617 年に發行され印刷された。 'History of the House and Race of Douglas and Angus' にも著した。 1644 年印刷された。 1644 年 1650 年の間に完成したものと見られる。 著者の著作として發行されたものはスコットランドに於て Cambridge の教授に於て發行された 'Cambdenia; id est, Examen nonnullarum a Gulielmo Cambreno in "Britannia", &c., 1614 年に發行された。 著書 Charles I. に對して 'Apologia Basilica; seu Machiavelli Ingenium Examinatum, in libro quem inscripsit Princeps', (Paris, 1626)。 'Biographie Universelle' にも著した。 1652 年 著者の著作として發行された。

帝國主義研究  
——  
略歴 明二先生 東大法律部卒  
現職 東大經濟部教授  
著者 植民及殖民政策  
南洋羣島の研究  
帝國主義研究  
日本の地位を論ずる

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
昭和二十四年六月一日 第二刷發行  
定價二百五十圓  
著者 矢野龍溪  
發行所 東京都千代田區神田區三丁目二番地 永興吉  
印刷者 保科清春  
東京都千代田區九段二丁目一  
番地 保科清春  
發行所 東京都千代田區  
神田區三丁目二番地  
株式會社 白日書院  
電話九百四三三八番

日本印刷工業株式會社印刷・排川製本

帝國主義研究  
——  
略歴 明二先生 東大法律部卒  
現職 東大經濟部教授  
著者 植民及殖民政策  
南洋羣島の研究  
帝國主義研究  
日本の地位を論ずる

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
昭和二十四年六月一日 第二刷發行  
定價二百五十圓  
著者 矢野龍溪  
發行所 東京都千代田區神田區三丁目二番地 永興吉  
印刷者 保科清春  
東京都千代田區九段二丁目一  
番地 保科清春  
發行所 東京都千代田區  
神田區三丁目二番地  
株式會社 白日書院  
電話九百四三三八番

日本印刷工業株式會社印刷・排川製本

挿入文書

47-5 m

~ Dumoulin ~ Tilenus ~ 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100  
X 'de contr' Assassin; ou Reponse à l'apologie des Jesuites' (1612) & 'L'Assassinat du Roi; ou Maximes du Vieil de la Montagne pratiquées en la personne de défunt Henri le Grand' (1617) & 1618

~~George Buchanan~~ George Buchanan ~ 'Daphn-Amaryllis' ~ 'Lusus Poetici' (1605), 'Henrici Principis Justa' & 'Regi suo Gratulatio' ~ 1633 ~ 1634 ~ 1635 ~ 1636 ~ 1637 ~ 1638 ~ 1639 ~ 1640 ~ 1641 ~ 1642 ~ 1643 ~ 1644 ~ 1645 ~ 1646 ~ 1647 ~ 1648 ~ 1649 ~ 1650 ~ 1651 ~ 1652 ~ 1653 ~ 1654 ~ 1655 ~ 1656 ~ 1657 ~ 1658 ~ 1659 ~ 1660 ~ 1661 ~ 1662 ~ 1663 ~ 1664 ~ 1665 ~ 1666 ~ 1667 ~ 1668 ~ 1669 ~ 1670 ~ 1671 ~ 1672 ~ 1673 ~ 1674 ~ 1675 ~ 1676 ~ 1677 ~ 1678 ~ 1679 ~ 1680 ~ 1681 ~ 1682 ~ 1683 ~ 1684 ~ 1685 ~ 1686 ~ 1687 ~ 1688 ~ 1689 ~ 1690 ~ 1691 ~ 1692 ~ 1693 ~ 1694 ~ 1695 ~ 1696 ~ 1697 ~ 1698 ~ 1699 ~ 1700

挿入文書



'History of the House of Wedderburn, written by a son of the family, in the year 1611' は、第十四世紀末 Wedderburn 初代領主 David に始まり、著者自身の early career に及ぶ、curious and ingenious eulogy である。1839年に至って Abbotsford Club に依り印刷された。'History of the House and Race of Douglas and Angus' は更に堂々たる family history である。1644年、king's printer の Evan Tyler によって Edinburgh で印刷された。初期の copies の題扉はさまざまの date がないもの、1648年とされているもの、title の 'A Generall History of Scotland, together with a particular History of the Houses of Douglas and Angus' となっているものもある。Hume はこの『史』を 1625—30年の間に完成したものである。(最初の版は非常に不完全であり 1743年の編者が著者の manuscript を綿密に検討して復原した。) Sholto Douglas (Donald Bane の征服者) は Angus の八代伯爵 Archibald Douglas<sup>(1555-1588)</sup> 位を収む。

その他の著作として <sup>(1555-1588)</sup> 著者の 1617 年の著作は、Camden の Scotland を輕視した意見に対する攻撃である。'Cambdenia; id est, Examen nonnullarum a Gulielmo Cambreno in "Britannia," &c., 1617年に書かれたもので未発行、及び Charles I に捧げられた著 (Paris, 1626) の題は 'Apologia Basilica; seu Machiavelli Ingenium Examinatum; in libro quem inscripsit Princeps.' 'Biographie Universelle' によれば、彼は James I に示唆されて、justification の問題について Dumoulin と Lilenus とを和解さすべく試み、又 'Le contr' Assassin; ou Reponse à l'Apologie des Jesuites' (1612) 及び 'L'Assassinat du Roi; ou Maximes du Vieil de la Montagne pratiquées en la personne de défunt Henri le Grand' (1617) の著がある。

幼い時から Latin poems を書き、George Buchanan から賞讃され

息子  
Wedderburn 家の『史』 同家の子孫により 1611年書かれた

Douglas と Angus 両家の家柄及び子孫の『史』

「カムデン = ア ; “ブリタニヤ = ア” にあはれた ウィリアム・カムデンの多くの説の検討」

「王者の弁明、或は(君主の名を記せる書物に於ける)マキアヴェリヤの天賦の才の検討」

57=2 アマリリス

(63) 詩のたはむれ

た。'Daphn-Amaryllis' は 14才の作。'Lusus Poetici' (1605)  
は Arthur Johnston の 'Deliciae Poetarum Scotorum' に編入された。  
Prince Henry の 名 (な) を 題 (だい) と し 'Henrici Principis Juxta' と。又、  
1617年 王 (おう) の Scotland に 歸 (かへ) った 時 (とき) 'Regi suo gratulatio' と書いた。  
彼は 最上 (さいじょう) の Latin models に 親 (か) しみ、その 詩 (うた) は 清新 (せいしん) で 力強 (りきじょう) い。彼の  
Latin poems は、1632年 及び (及び) 1639年に Paris で 発行 (はつこう) された。二  
度 (たび) の 時 (とき) は、息子 (こ) James の 監修 (けんしゆ) で 増補 (ぞうほ) し、title は 'Davidis  
Humii Wedderburnensis Poemata Omnia. Accessere ad finem  
Unio Britannica et Prælium ad Lipsiam soluta oratione'

(D. N. B.)

王に捧げた祝詞

60-63. Hume, David, 1711-1776.

英国の哲学者・歴史家。Edinburghに生れ、法律と字人だが、'passion for literature'のためにこれをやめ、1734年から1737年までフランスに住み、歸英、*A Treatise of Human Nature* (1739)を出したが顧みられず、*Essays Moral and Political* (1741-2)に至ってButlerに認められた。1763年から1765年まで、パリの英国大使館の書記官となり、宮廷及び社交界に歓迎された。Rousseauと連れてロンドンに歸ったが、数ヶ月の後Rousseauの邪推から喧嘩をした。1769年以後彼の死までEdinburghに静かな生活を送った。英国の思想家のうちで最も純粹に全知的な哲学者であり、死に至るまで動することなく、勇敢に彼の思想を主張し、真理以外の何物にも従はうとはしなかつた。彼の哲学の中心問題は人性の研究に在り、これを悟性論、感情論、道徳論の三つに分けた。而して認識には本源的と派生的とをみとめ、これを印象及び觀念と呼ぶ。この二つは聯想の法則に従つて結合するが、これには類似、接近、因果の三つがある。このうち類似の聯想は機械的であつてこれのみが方法としては正しい。これによつて確實なる判断が得られるが、これは数学に於てのみ許される。而して接近の聯想は事實の字を成立せしめ、これに必然的意義を與へるものが因果の聯想である。而して因果の觀念は習慣性の感情から生ずるもので、因果關係はただ信によるのみである。かくて彼は科学の根底に疑を懐き、ひたすら經驗と觀察とに頼つて普遍的原理を探求しようとしたところから、彼の説は懐疑的實證主義と呼ばれる。かくて彼はEdinburghの図書館長時代に英国史を書いたが、歴史と哲学とを結合させ、過去は諸々の種族の存する堆積された經驗を包含して居り、我々の經驗的知識は過去によつて現在の與へ得る論證を補足する、而してこの事が科学の眞の目的に因りて最も有益な教訓、即ち行爲の法則を與へ得るものと考へた。上掲の著書の他に彼の念心の作は、*An Enquiry concerning the Principles of Morals* (1751)、歴史上の作 *History of Great Britain* (1754-62) 等なほ多数あるが、哲学上の立場は處々作より一歩も出てゐない。(英米文字辞典)

65, 66. Johnson, Samuel, 1709—1784.

英国の文豪。Lichfield (Staffordshire) の書店の子として生れ、Oxford (Pembroke College) に学んだが、貧困のために学位を得ずに卒業。田舎の小学校の補助教師をしたり、Birmingham の出版者の手助けをしたりして漸く口を糊してゐたが、1735年二十才以上の年長の未亡人 Mrs. Porter と結婚して、Lichfield の近在 Edial に転居を伺った。しかし入門者は僅か三人だったので、その中の一人 David Garrick を伴つてロンドンに出た。時に1737年、二十八才であった。貧乏と闘ひつゝ Gentleman's Magazine に議会記事と寄稿する傍ら、Juvenal 風の諷刺詩 London (1738)、不運な友人の傳記 Life of Savage (1744、後に「詩人列傳」中に加へられた)、野心の愚なことを痛切に説いた詩 The Vanity of Human Wishes (1749)、悲劇 Irene (1749) 等を書いた。1750年に創刊した一週二回発行の新報 The Rambler を殆ど独りで執筆した。廢刊の1752年には最愛の妻を失つた。1747年に稿を起した The Dictionary of the English Language の編纂は、妻を失つた悲嘆の中にも着々進行して、1755年遂に完成を見た。着手当初 Chesterfield 伯の役増を求めたが、顧みられず、貧困と持病の瘡疥とに堪へつゝ、この驚歎すべき一大難事を單身独力で成就した彼の意気と精勵とは、Chesterfield 伯宛の有名な書簡にもよく表はれてゐる。1758—60年の間毎週 The Idler を執筆。母の葬式の費用を支拂ふために書いた Rasselas, Prince of Abyssinia (1759) は、W. Raleigh が「あらゆる文字中、最も力強い教訓小説の一つ」と評したものである。この頃から次第に彼の名声は高まり、1762年には三百ポンドの年金を與へられるに至り、精細無比な彼の傳記を書いた Boswell と会つたのはその翌年である。彼が中心となり、Burke, Reynolds, Goldsmith 等を会員とする有名な The Club (後 The Literary Club と改名) が設立され、毎週一回旗亭 Turk's Head に相会して縦横に談義するやうになつたのも、同じ年であつたらうと推定される。Anecdotes

of the late Samuel Johnson (1786)の著者 Mrs. Thrale及びその夫なるロンドンに裕福な商人と親しくなったのは1764年で、その後は彼等の邸に長く滞在して款待を受けることも珍しくなかつた。1765年出版のShakespeare全集の緒論は、彼の著作中のみでなく、Shakespeare批評中、最も優秀な一つであり、三一致の法則を金科玉條とする批評を加へ、Shakespeareの浪漫的偉大さを認めらる。1773年 Boswellとスコットランドに遊んだ時の旅行記 A Journey to the Western Islands of Scotland (1775) 也。

Thrale夫妻と Walesに旅した時の日記 A Diary of a Journey into North Wales, in the year 1774 (1816) には、自然に対する深い印象が記されて居り、都会生活と好んだ彼にも、何處か浪漫的なものに対する感があつたことを思はせる。「英語辞典」と共に彼の二大功績である The Lives of the English Poets (1779-81) 十巻は、書肆の方で作つて来た選集に附した序文であるが、既にこの頃は地位名声を確立して財政上不自由になつたので、極めて自由に、語ることが如く樂々と、五十二詩人の傳記と執筆することゝ出来た。彼は文筆に携はること四十五年の長きに及んだが、その偉大は筆にあらすして、その舌と人間とにある。粗野であるが、心は柔しく同情に富み、偏見に充ちた 'the last of the Tories' (Carlyle) であるが、叔父に媚びず、弱者を憐み、懐疑論横行の時代に正統派の信仰を固持した。また剛毅廉直、独立自主、褒貶常に誠意を以て貫き、いかに諧謔に富み、知力拔群、博覽強記、絶倫の字彙を有し、いかに字者をもつて甘んじなかつた。あらゆる虚偽を憎む真摯な道德的態度をもつて人生の真相を把握せんと努めた彼は、一代の師表と仰かれ、今日に至るまで英国民の理想的人物として慕はれてゐる。

(英米文学辞典)

68. La Bruyère, Jean de, 1645 - 1696.

French essayist and moralist. Paris 生い。中流階級の出。父は the Hôtel de Ville の controller-general of finance.

Oratorians に教育され、the university of Orleans に学んだ。辯護士となり、1673年 Caen の revenue department に一つの post を買取り、noblesse の身分と収入を得た (この職は 1687年賣った)。

Bossuet によつて 1684年 the great Condé 家に紹介され、同家の孫の Henri Jules de Bourbon 及びその girl-bride の tutor になった。生涯については多く知らぬ事がある。彼に因つて二の批評によつてみれば、寡黙で注意深く、我々 awkward の人である (the manners of a sennu). Addison の文に於て彼を師と仰いでゐた事は疑ない。彼の Caractères は 1688年に發表され、Nicolas de Malezieu の豫言した通り、多くの讀者と多くの敵を作つた。後者の筆頭は Thomas Corneille, Fontenelle 及び Bemserade で、あつた。Bossuet の友情と Condé 家の保護によつて、彼は引つゞきこの書に、(版を重ねる毎に)彼の同時代人の新しい portraits を書かへて行つた。しかし彼は the Academy の有力者達を槍玉にあつた爲に同会に入らず、1691年には三度退会し、1693年に死すまで堅持した。

彼の Academy 会員就任講演は、すくなくともあつたが、嚴しい批判の目標になり、とりわけ近代派 (the partisans of the 'moderns' in the 'ancient and modern' quarrel) から批判された。literary work は、Caractères とこの就任講演の他に、Theophrastus の翻譯と二、三の書簡 (the prince de Condé その他宛) それに、死後出版された、一篇の curious and much-disputed treatise があるのみ。

Caractères に対する評價は、從來 過大であつたかも知れないが、本質的に作品であるとは疑なく、その plan は、既存の作品の要

素作はたゞ他 Theophrastus の翻譯と二、三の  
たものであつたが、嚴しい批判の目標とされた。  
彼の Academy 会員就任講演 (一六八三) は、すく  
あつたが、同会員になつてゐた。  
書かへて行つたが、Academy の有力者達と槍玉に  
と重なり、遂に同時代人達の新しい、人物描寫と  
友情と Condé 家の保護によつて、彼は引つゞきこの書に、  
と筆頭とつた。Bossuet の  
讀者と Thomas Corneille, Fontenelle, Bemserade  
Nicolas de Malezieu の豫言した通り、多くの  
友に Joseph Addison に似通つた人物の友人であつた  
敵を文字上の師と仰つて  
多くも知らぬ事がある。寡黙で注意深く  
同家の孫の Henri Jules de Bourbon 及びその girl-bride の tutor になつた。  
Bossuet によつて 1684年 the great Condé 家に紹介され、同家の  
一の地位を買ひ取り、貴族の身分と収入を得た。  
辯護士になり、1673年 Caen の revenue department に一つの post を買取り、noblesse の身分と収入を得た (この職は 1687年賣った)。  
Oratorians に教育され、the university of Orleans に学んだ。辯護士となり、1673年 Caen の revenue department に一つの post を買取り、noblesse の身分と収入を得た (この職は 1687年賣った)。  
French essayist and moralist. Paris 生い。中流階級の出。父は the Hôtel de Ville の controller-general of finance.  
68. La Bruyère, Jean de, 1645 - 1696.

68. La Bruyère, Jean de, 1645—1696.

French essayist and moralist. Paris 生れ。中流階級の出。父は the Hôtel de Ville a controller-general of finance.

Oratorians に教育され、the university of Orleans に学んだ。辯論士となり、1673年 Coen の revenue department に一つの post を買ひ取り、no-blesse の身分と収入を得た (この職は 1687年賣った)。

Bossuet によつて 1684年 the great Condé 家に紹介され、同家の孫の Henri Jules de Bourbon 及びその girl-bride の tutor になつた。生涯については多く知る事が出来ないが、彼に因する二三の批評によつてみると、寡黙で注意深く、我分 awkward な人であつたらしく、manners が Joseph Addison に似て居り、Addison が文字に於て彼を師と仰いでゐた事は疑ない。彼の Caractères は 1688年に發表され、Nicolas de Malezieu が豫言した通り、多くの讀者と多くの敵を作つた。後者の筆頭は Thomas Corneille, Fontenelle 及び Bensérade であつた。Bossuet の友情と Condé 家の保護によつて、彼は引つゞきこの書に、(版を重ねる毎に)彼の同時代人の新しい portraits を書加へて行つた。しかし彼は the Academy の有力者達を槍玉にあはせた爲に同会に入らず、1691年には三度退会し、1693年にせうせう 隠居した。

彼の Academy 会員就任講演は、すくなくともあつたが、嚴しい批判の目標になり、とりわけ 近代派 (the partisans of the 'moderns' in the 'ancient and modern' quarrel) から批判された。Literary work は、Caractères とこの就任講演の他に、Theophrastus の翻譯と二三の書簡 (the prince de Condé その他宛) それに、死後出版された、一篇の curious and much-disputed treatise があるのみ。

Caractères に対する評價は、從來 過大であつたかも知れないが、すくなくとも 傑作であることは疑なく、その plan は、既存の作品の要

フ、フリイエール

フランスの 聖職者。 中流階級の出で、オウ  
トリオ令士に教育され、オレアン大学に学んだ。  
辯論士になり、一六七三年 Caen の 財務局に  
一つの地位を買ひ取り、貴族の身分と収入を得た。  
Bossuet によつて一六八四年 Condé 家に紹介され  
同家の孫、家庭教師になつた。生涯については  
多くも知らず事が出来ないので、寡黙で深遠  
く教養が豊富で、彼も文字士の師と仰いで  
ゐた Joseph Addison に似通つた物腰の人であつた  
う。 Caractères は一六八八年に發表され、  
Nicolas de Malezieu の 平言一語通りで、  
讀者と Thomas Corneille, Fontenelle, Benserade  
と筆頭とすつた多くの敵を作つた。 Bossuet の  
友情と Condé 家の保護によつて引つゞき敗  
ち重なり毎に、同時代人達の新し、人物描写も  
書物へ行つたが、字士院の有力者達も槍玉に  
あつた為にも、同令員にならなかつた。

彼の字士院会員 凱化講演 (一六九三) は、すく  
なくもあつたが、厳し、批判の目標となつた。

著作は在る他 Theophrastus の 概説と二、三の

フ、フリイエール 2

書簡、それに死後出版された一篇の多くの議論  
も惹起した 変わった論文があるのみである。

Caractères に対する評価は従来過大であつ  
たかも知れぬ。すくなく作品である、それは疑な  
く、その最初と思ひつき、Theophrastus の 論文  
から得、個有の道德的概略と social Dutch  
painting に、モリエールに 階級、バスキルの 果敢録  
La Rochefoucauld の Maximes 及び十七世紀の  
文字的産物である、人物描写の各特色を巧妙に  
組合せて全く新作を成した。人物スケッチは  
驚く程美の利いた、そして或意味で非常に真  
に迫つたものであり、描かれた人物に大きな満  
足をそれにもまして 鋭い痛みを與へた。 ~~その~~  
彼の作品には何か不足なものがあつた。モリエール  
やニエスピアに比べると、藝術家といふより  
むしろ写真師 <sup>photographer</sup>、その金言も、La Rochefoucauld  
より上り下り、その彫刻的正確さ、ロマン的  
簡潔さ、及び倫理的直観の深さに比べると、  
フリイエールは被相な 観察を才氣で包んだ  
文字的 petit-maitre の 狂子の 感らし ~~感らし~~  
~~が~~、しかし彼は豊富な機智や個人の中



—帝國主義研究—  
 著者 岡二六生 東京法政學部  
 略歴 現職 東京法政學部教授  
 著書 植民及領土政策  
 南洋羣島の研究  
 帝國主義研究  
 日本の偽を露す者

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一期發行  
 昭和二十四年六月一日 第二期發行  
 定價二百五十圓  
 著者 矢野龍一 原忠雄  
 發行者 增永要吉  
 東京都千代田區錦町三ノ二  
 印刷者 保科清春  
 東京都千代田區九段二丁目一  
 發行所 白日書院  
 東京都千代田區  
 神田區錦町三ノ二  
 電話九段四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・柱川製本

—帝國主義研究—  
 著者 岡二六生 東京法政學部  
 略歴 現職 東京法政學部教授  
 著書 植民及領土政策  
 南洋羣島の研究  
 帝國主義研究  
 日本の偽を露す者

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一期發行  
 昭和二十四年六月一日 第二期發行  
 定價二百五十圓  
 著者 矢野龍一 原忠雄  
 發行者 增永要吉  
 東京都千代田區錦町三ノ二  
 印刷者 保科清春  
 東京都千代田區九段二丁目一  
 發行所 白日書院  
 東京都千代田區  
 神田區錦町三ノ二  
 電話九段四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・柱川製本

挿入文書

17. 17. 17. 17. 17. 3

偶にそのみこむ 他文字的にも高く評価の  
たつて、 Racine & Massillon の中に、  
古典の海に属する作家の最上のも  
のこらう。

挿入文書

——帝國主義研究——  
明二在 東大法政學部  
局長 東大經濟學部教授  
著者 植長 植長教授  
略 南洋島の研究  
著者 帝國主義研究  
日本の徳を論ずる

會員號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一期發行  
昭和二十四年六月一日 第二期發行  
定價二百五十圓  
著者 矢野 龍溪  
發行所 東京都千代田區神田保町三ノ二  
東京都千代田區保町三ノ二  
印刷者 保科 清春  
東京都千代田區九段二丁目一  
發行所 東京都千代田區保町三ノ二  
白 日 書 院  
電話九段三三八號

日本印刷工業株式會社印刷・桂川製本

挿入文書

素を斬新巧妙に組合せて、独創的である。Theophrastusの論文から first ideaを得、固有の ethical generalizations と social Dutch paintingに、Montaigne 随筆、Pascalの Pensées、La Rochefoucauldの maxims、及び 17世紀の文筆的肖像 'portrait' の各特色を結合し、全く新たな作を成した。作品の題も、非常な desulteriness が、Montaigneを想はせるが、はるかに寸釘的で continuity がない。paragraphs は短く、金言と文筆的倫理的批評と有名な人物スケッチから成る。人物スケッチは驚く程気の利いた、そして或意味で非常に真に迫ったものであり、描かれた人々に大きな pleasure とそれにまじり exquisite pain と與へた。

彼の作品には何か不足なものがあり、抽象的な特色を一個の人物の如きタイプに具現した Molière や、個性を有する人を永遠の相の下に描いた Shakespeare に比すると、artist といふより photographer と云ふべき人である。彼の maxims も、表現が素晴しく、しばしば真実を的確に突いてゐるが、La Rochefoucauld のものよりレベルが下である。great Frondeur の彫刻的正確さ、ローマ的簡潔さ、及び倫理的直観の深さに比べると、La Bruyère には皮相な觀察と才氣で包んだ文筆的 petit-maitre の様子が感ぜられる。しかし彼はその豊富な機智や personal "malice" によってフランスの文字に高い地位を占めただけでなく、純文筆的価値も高く認めらるべきで、Racine や Massillon と共に、classical French と稱される部類に属する作家の最上の者であらう。(E. B.)

69. La Condamine, Charles Marie de, 1701 — 1774.

French geographer and mathematician. Paris 生れ。  
軍人たるべく教育されたが、science と geographical exploration  
に心を向けた。the Levant の scientific expedition (1731) に  
参加後、Louis Godin や Pierre Bouguer と共に、赤道附近  
に於ける子午線測定の為 (to determine the length of a degree  
of the meridian in the neighbourhood of the equator) 1735  
年 Peru に派遣された探検隊の member になった。しかし prin-  
cipals とすまゆかた、困難多く、終に彼は一同と別れて Quito  
から Amazon を下り Cayenne に着いた。Amazon の scientific  
exploration をなした最初の人である。1744年 Paris に歸り、  
彼の測量と旅行の結果を、Amazon の地図を附して Mém. de  
l'académie des sciences に發表した (1745年) (英訳は  
1745-1747)。Rome を訪れ、the Roman foot の長さを正確  
に測定する目的で、ancient buildings と丹念に測量した。  
South America への航海の日誌は 1751年 Paris で出版された。  
彼は更に、主として South America に於ける彼の仕事に関する、種々  
の同題について書き、又 inoculation に賛成してゐる。パリ  
で死んだ。(E. B.)

7. コンタミン  
フランスの地理学者、数学者。  
軍人たるべく教育されたが、科学と地理的  
探検に心を向けた。東部地中海沿岸諸國の  
研究旅行に参加 (1731) 後、Louis Godin  
と Pierre Bouguer と共に、赤道附近に於ける  
子午線測定の為 1735年ペルーに派遣さ  
れた探検隊に加つた。しかし 1744年  
キトからアマゾン川を下り、アマゾン  
川に於ける子午線測定の結果を、アマゾン  
の地図を附して Mém. de  
l'académie des sciences に發表した (1745年)。  
Rome を訪れ、ancient buildings と丹念に測量した。  
South America への航海の日誌は 1751年 Paris で出版された。  
彼は更に、主として South America に於ける彼の仕事に関する、種々  
の同題について書き、又 inoculation に賛成してゐる。パリ  
で死んだ。(E. B.)

69. La Condamine, Charles Marie de, 1701 — 1774.

French geographer and mathematician. Paris 生れ。  
軍人たるべく教育されたが、science と geographical exploration  
に心を向けた。the Levant の scientific expedition (1731) に  
参加後、Louis Godin や Pierre Bouguer と共に、赤道附近  
に於ける子午線測定の高 (to determine the length of a degree  
of the meridian in the neighbourhood of the equator) 1735  
年 Peru に派遣された探検隊の member になった。しかし prin-  
cipals とうまくゆかず、困難多く、終に彼は一同と別れて Quito  
から Amazon を下り Cayenne に着いた。Amazon の scientific  
exploration をなした 最初の人である。1744 年 Paris に歸り、  
彼の測量と旅行の結果を、Amazon の地図を附して Mém. de  
l'Académie des sciences に發表した (1745 年) (英訳は  
1745—1747)。Rome を訪れ、the Roman foot の長さを正確  
に測定する目的で、ancient buildings を丹念に測量した。  
South America への航海の日記は 1751 年 Paris で出版された。  
彼は更に、主として South America に於ける彼の仕事に関する、種々  
の問題について書き、又 inoculation に賛成してゐる。パリ  
で死んだ。 (E. B.)

フ・コンダミン

フランスの地理学者、数学者。

軍人として教育された。数学と地理的。

探検に心を向け、東部地中海沿岸諸国の  
研究旅行に参加(一七三一)後、Louis Godin  
や Pierre Bouguer と共に、赤道附近に於ける  
子午線測定のため一七三五年ペルーに派遣さ  
れた探検隊に加わった。一〇一引舟者達と  
うまくゆかず別れ、Quito から Amazon 上  
り Cayenne に着いた。アマゾン<sup>の</sup>数学的調査  
をなした。<sup>は</sup>彼の最仰であり、パリに歸る  
その<sup>調査と探検の</sup>結果をアマゾンの地図を附して Mém. de  
l'académie des sciences に發表した(一七四五)。  
ロマを訪れた時には、ローマ尺の長さも正確に  
測定する目的で、古代の建築物を丹念に測量  
した。南アフリカへの航海の日記は一七五一  
年パリで出版された。

挿入文書

帝國主義研究  
——  
略歴 明六社 東大法律部  
 著者 櫻井 東大経済部教授  
 著者 植民及植民政策  
 著者 南洋群島の研究  
 著者 帝國主義研究  
 著者 日本の信を疑する

會員番號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
昭和二十四年六月一日 第二刷發行

定價二百五十圓

著者 矢野 龍溪  
 著者 内田 忠雄

發行所 東京都千代田區神田區神保町三ノ二  
 發行所 東京都千代田區神田區神保町三ノ二  
 印刷者 保科 清春  
 印刷者 東京都千代田區九段二丁目一  
 印刷者 保科 清春

發行所 東京都千代田區神田區神保町三ノ二  
 發行所 東京都千代田區神田區神保町三ノ二  
 印刷者 保科 清春  
 印刷者 東京都千代田區九段二丁目一  
 印刷者 保科 清春

白 日 書 院  
電話九百三五六番

日本印刷工業株式會社印刷・柱川製本

挿入文書



90. La Curne de Sainte-Palaye, Jean Baptiste de, 1697-1781.

savant français, né à Auxerre en 1697, mort à Paris en 1781. Il appartenait à une ancienne famille et son père avait été gentilhomme du duc d'Orléans, puis receveur du grenier à sel d'Auxerre. D'une constitution débile, le jeune La Curne resta dans le giron maternel jusqu'à l'âge de quinze ans et commença seulement alors ses études. Il travailla tant et si bien, pour réparer le temps perdu, qu'à vingt-sept ans il était admis à l'Académie des inscriptions (1724), bien qu'il n'eût encore rien publié à cette époque. En 1725, il fut envoyé à Wissembourg, auprès du roi Stanislas, et chargé d'une mission diplomatique; mais il ne tarda pas à revenir aux lettres. D'abord il s'occupa d'un mémoire sur deux passages de Tite-Live et de Denys d'Halicarnasse (1727), puis il dirigea ses recherches sur nos origines nationales. Jusqu'en 1740 il donna de curieuses notices puisées dans les vieilles chroniques françaises. « La lecture qu'il faisait des chroniqueurs et des romanciers le conduisit à former une triple et vaste entreprise, d'expliquer d'abord l'une des institutions les plus remarquables du moyen âge, la chevalerie; ensuite de composer un dictionnaire des antiquités françaises et un glossaire complet des variations de notre langue. Au premier de ces ouvrages, où l'intérêt l'emporte sur l'érudition, il voulut joindre une histoire des troubadours. Dans ce dessein, il retourna en 1749 en Italie (il y avait fait un voyage en 1739), en rapportant quatre mille pièces inédites ou peu connues, apprit

に因する詳興と、フランク語の史書と家系  
 了騎士道の説明（次いでフランクの古  
 史に、中世の最も注目する歴史、そのあ  
 記録作者や小説家の作品を讀むに  
 いてフランクの國の起源と研究対象と一に  
 の中、二箇處に因する重（著）は頭一  
 年には Tite-Live と Denys d'Halicarnasse  
 の二篇のフランクの歴史に對して、1727  
 年 Messembourg と Stanislas 侯爵に對して  
 遣はした、聖年 外交上の使命に掛かる  
 des inscriptions (文部省の事務) の  
 發表の 1727 年の 1727 年の著作の  
 非常に勤懇に 夫の時に 1727 年の  
 には、その 1727 年の 1727 年の  
 の 1727 年の 1727 年の 1727 年の  
 の 1727 年の 1727 年の 1727 年の  
 1727 年の 1727 年の 1727 年の  
 フランクの 1727 年の 1727 年の  
 フランクの 1727 年の 1727 年の

に 2  
 ン公  
 した  
 15才  
 既い  
 3才  
 2才  
 ptions  
 725年  
 29  
 書  
 研究  
 古い  
 「記  
 三倍  
 世a  
 月(1  
 語a  
 1  
 ハ  
 思  
 6才  
 2才  
 1=知

70. La Curne de Sainte-Palaye, Jean Baptiste de, 1697-1781.

savant français, né à Auxerre en 1697, mort à Paris en 1781. Il appartenait à une ancienne famille et son père avait été gentilhomme du duc d'Orléans, puis receveur du grenier à sel d'Auxerre. D'une constitution débile, le jeune La Curne resta dans le giron maternel jusqu'à l'âge de quinze ans et commença seulement alors ses études. Il travailla tant et si bien, pour réparer le temps perdu, qu'à vingt-sept ans il était admis à l'Académie des inscriptions (1724), bien qu'il n'eût encore rien publié à cette époque. En 1725, il fut envoyé à Wissembourg, auprès du roi Stanislas, et chargé d'une mission diplomatique; mais il ne tarda pas à revenir aux lettres. D'abord il s'occupa d'un mémoire sur deux passages de Tite-Live et de Denys d'Halicarnasse (1727), puis il dirigea ses recherches sur nos origines nationales. Jusqu'en 1740 il donna de curieuses notices, puisées dans les vieilles chroniques françaises. « La lecture qu'il faisait des chroniqueurs et des romanciers le conduisit à former une triple et vaste entreprise, d'expliquer d'abord l'une des institutions les plus remarquables du moyen âge, la chevalerie; ensuite de composer un dictionnaire des antiquités françaises et un glossaire complet des variations de notre langue. Au premier de ces ouvrages, où l'intérêt l'emporte sur l'érudition, il voulut joindre une histoire des troubadours. Dans ce dessein, il retourna en 1749 en Italie (il y avait fait un voyage en 1739), en rapporter quatre mille pièces inédites ou peu connues, apprit

フランスの字者。オーグセールに1697年生れパリにて1781年に死んだ。古い家柄に属し。父はオルセアン公の臣で。後、オーグセールの塩監理所の収入役であった。生れつき体が弱かったため、La Curne少年は15才まで母の許にとこまり、その後はじめて勉学に専らした。非常に勤勉で、失った時をとり返さうとつとめたので、27才の時には、俗名の著作を發表してみなかつたに、このほらず Académie des inscriptions (史学アカデミー)の会員となった(1724)。1725年彼は外交上の使命を帯びて Wissembourg の Stanislas 王のもとに遣された。しかし乍ら間もなく彼は文字にもとつた。先づ Tite-Live と Denys d'Halicarnasse の二箇所に関心寛へ書に没頭し(1727)、次にフランスの國の起源を研究対象とした。1740年に至る迄彼はフランスの古い記録にもとつた稀らしい記述を發表した。「記録作者や小説家の作品を読むことによつて彼は三倍にもなる莫大な計画を抱くに至つた。即ち、中世の最も注目すべき制度の一つである騎士道を説明し、次いでフランスの古事に関する辞典と、フランス語の変遷の完全な辞典をつくること。字彙よりもむしろ興味を勝つてゐる最初の著作に、彼はトルバートル(南方吟遊詩人)の「史を附記したいと思つた。この目的から彼は1749年にイタリアにもとつた(彼は1739年にもそこに旅行したことがあつたので)、そして、イタリアから、未發表乃至余りに知

ラ・キユルヌトサントパル

フランスの学者。古い家柄に属し、父は  
オレサン公の臣で、後オーステルの塩監理所  
の收入役であった。生れつゝ体が弱かつた  
ので、La Courne 少年は十五才まで母の許  
にといまり、その後はじめて勉学に就いた。  
非常に勤勉で、失つた時をとり返さうとす  
るため、二十七才の時には、同年の著作を  
發表して、あつたことにも、はなは Academie  
des inscriptions (史学アカデミー) の會員に  
推された。翌年外交上の使命を帯び、  
Wisssembourg の Stanislas 王のもとに遣はれた  
が、向もゆく文字の研究にわたつて、一七三七  
年には Tite-Live と Denys d'Halicarnasse  
の中、二箇處に因する實(書)に没頭し、次  
いでフランスの国の起源を研究対象とした。  
記録作者や小説家の作品も讀むことに  
よつて、中世の最も注目すべき制度の一つであ  
る騎士道を説明し、次いでフランスの古事  
に因する辞典と、フランス語の變遷の完全

ラ・キユルヌ 2

な辞典を作らうといふ莫大な計画を抱  
くに至つた。字通よりもむしろ興味を勝  
てみる最初の著作に、彼はトルントルの「  
史学アカデミー」の事と思ひ、一七四九年再び  
(~~第~~ <sup>第</sup>一回) (一七三九年) イタリヤに訪れた。其處  
から未發表乃至余りに知られておひ、四  
十箇の作品を持ち歸り、フロアアンス語を  
独学して、莫大な資料から、フロアア二二三  
卷の全集をつつた。次に古代フランス語  
辞典の一部を世に出したが、しかし、彼も最  
も注目すべき作品は「フランス故事辞典」  
あり、これはフロアア版で四十巻を下らぬ。  
現在国立図書館に所蔵されておるが、その  
量の余りに莫大な為、刊行を考へる事は、  
許さぬ。史学アカデミー會員の資格に  
加へて、一七五八年には、語学上の業績によ  
り、佛蘭西院會員となり、又 Comca, Dijon,  
Nancy のアカデミーの會員でもあつた。

—帝國主義研究—  
 著者 岡六生 東大法政學部  
 略歴 現職 東大教授  
 著者 植民及國民政策  
 著者 南洋羣島の研究  
 著者 帝國主義研究  
 著者 日本の偽善者

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
 昭和二十四年六月一日 第二刷發行  
 定價二百五十圓

著者 矢野龍一  
 著者 內田忠雄  
 著者 增永要吉  
 著者 保科清春

發行所 東京千代田區神田區三丁目二番地  
 白晝書院  
 電話九百四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・柱川製本

—帝國主義研究—  
 著者 岡六生 東大法政學部  
 略歴 現職 東大教授  
 著者 植民及國民政策  
 著者 南洋羣島の研究  
 著者 帝國主義研究  
 著者 日本の偽善者

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
 昭和二十四年六月一日 第二刷發行  
 定價二百五十圓

著者 矢野龍一  
 著者 內田忠雄  
 著者 增永要吉  
 著者 保科清春

發行所 東京千代田區神田區三丁目二番地  
 白晝書院  
 電話九百四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・柱川製本

挿入文書

挿入文書

ウ・ニコルヌ  
その他の作品は  
「美術と文学における良心趣味について」  
ヨーマン（の書簡）（一七五二）  
「オウカサンとニコラフ」（中世アリアス）（一七五三）  
「一つの政治的軍事的制度として見たる古騎士  
道に関する書」（一七五九—一七六一）  
（ポーランド語、英語、ドイツ語に訳された）

—帝國主義研究—  
著者 明二生 東大法學部卒  
略歴 現職 東大経済学教授  
著者 植民及植民政策  
南洋羣島の研究  
帝國主義研究  
日本の抱負を論ずる

會員證號 A 202006

昭和二十三年四月一日 第一期發行  
昭和二十四年六月一日 第二期發行  
定價二百五十圓  
著者 矢野龍一 內田忠雄  
發行所 東京都千代田區神田區保町三ノ二  
印刷所 東京都千代田區九段二丁目一  
保科清春  
白晝書院  
電話九四三三八番

日本印刷工業株式會社印刷・柱川製本

挿入文書

seul la langue provençale et forma de ses immenses matériaux une collection de 23 vol. in-fol. » Ensuite il donna une partie de son glossaire de l'ancienne langue française. Mais son ouvrage le plus considérable est le Dictionnaire des antiquités françaises, qui ne forme pas moins de 40 volumes in-folio. Cette collection, acquise par M. Moreau, se trouve actuellement à la Bibliothèque nationale, et ses dimensions ne permettent point de songer à la publier. Une tendre amitié unissait La Curme à son frère jumeau. Jamais ils ne se séparèrent; ils eurent le même logement, les mêmes habitudes, les mêmes sociétés, les mêmes amusements. Sainte-Palaye mourut plus qu'octogénaire. Outre son titre de membre de l'Académie des inscriptions, il avait été reçu, en 1758, à l'Académie française, en raison de ses travaux sur la langue, et il faisait aussi partie des Académies de la Crusca, de Dijon et de Nancy. Les autres ouvrages de ce savant sont: Lettre à Bachaumont sur le bon goût dans les arts et les lettres (s. l., 1751, in-12); Mémoires sur l'ancienne chevalerie considérée comme un établissement politique et militaire (Paris, 1759-1781, 3 vol. in-12). Le tome III, dont Ancillon fut l'éditeur, contient différentes pièces peu connues; une nouvelle édition annotée en a été donnée sous le nom de Charles Nodier (Paris, 1826, 2 vol. in-8°). Cet ouvrage a été traduit en polonais, en anglais et en allemand. Le même savant a publié, en 1756, le fabliau d'Aucassin et Nicolette (in-12). (P. Larousse. G. D. U.)

知らぬない 4000 篇の作品を持ち帰り、フランクフルト語を独字し、この莫大な資料から 23 卷 in-fol. の全集をつつた。」次に彼は、古代フランス語辞典の一部を世に出した。しかし彼の最も注目すべき作品は、フランス故事辞典であり、これは in-folio で 40 卷を下らない。この集は、モロー氏によって入手され、現在国立図書館に所蔵されて居り、その量が余りに莫大な爲に刊行を考へる事さへ許さない。La Curme は彼と双生児の兄弟とやさしい愛情で結ばれてゐた。彼等は決して別れることはなく、同じ家に住み、同じ習慣に従ひ同じ人々と付き合ひ、同じ娯樂をたのしんだ。Sainte-Palaye は、80 才を越すまで生きてゐた。史学 Académie 会員の資格に加へて、彼は 1758 年には語学上の業績により、アカデミ・フランセーズ会員となり、又 Crusca, Dijon, Nancy のアカデミーの会員でもあつた。この字者の他の作品には: 美術と文学における良き趣味についてバンヨーモンへの書簡 (s. l., 1751, in-12); 一つの政治的軍事的制度として見たる古騎士道に因する寛へ書 (1759-1781, 3 vol. in-12). Ancillon が刊行した第三卷は、余り世に知られて居ない種々の断片を含む; 註を附けた新版のシャルル・ド・イエの名のもとに出てる (1759, 1826, 2 vol. in-8°)。この作品は、ポランド語、英語、ドイツ語に翻訳された。La Curme はまた 1756 年に、中世フランクフルト オッカレンとニコレットを刊行した。

71-74: Laet, Joannes de, 1593 - 1649.

géographe flamand, directeur de la Compagnie des Indes, né à Anvers, mort dans la même ville en 1649. Très-versé dans l'histoire et la géographie, il a laissé des Descriptions de diverses parties du monde, écrites avec beaucoup de soin et d'exactitude. Les géographes venus après lui ont beaucoup profité de ses travaux, parmi lesquels nous citerons: Gallia, sive de Francorum regis dominis et opibus commentarius (Leyde, 1629, in-32); Hispania, sive de regis Hispaniae regnis et opibus commentarius (Leyde, 1629, in-32); Belgii confederati respublica (Leyde, 1630, in-32); De imperio magni Mogolis, sive India vera (Leyde, 1631, in-32); Persia, sive regni Persici status variaque itinera excerpta (Leyde, 1833, in-32); Portugalia (Leyde, 1641, in-32); tous ces ouvrages font partie de la collection des Petites républiques, publiées par les Elzéviros; Novus orbis seu descriptionis Indiae occidentalis libri XVIII (Leyde, 1633, in-fol.), traduit en français sous ce titre: Histoire du nouveau monde (Leyde, 1640, in-fol.); De gemmis et lapidibus libri duo (Leyde, 1647, in-8°), etc.

(P. Larousse: grand dictionnaire universel)

75.

フランドルの地理学者。インダ社の頭取。

「史と地理」とに非常に造詣が深く、世界

の諸地方の「描寫」も殊一に、これ等は「も

こめ」正確に書かれたもので、その後の地理学

者も大いに裨益した。その中で「次々」の

集「中」した。

「中」即ち「フランドル王の領土と權力に関する記

録」(一六三九)

「ヒスパニア即ちスペイン王の王國と權力に関する

記録」(一六三九)

「モゴールの帝國即ち莫のインドに關する

大モゴールの帝國即ち莫のインドに關する

「ヒスパニア即ちペルシヤ王國の狀態及旅程述

」(一六三三)

「たにたか」(一六四一)

「新」國即ち西インド地方の「敘景」十八卷

「インド諸國の概況」(一六三三)

「新」世界史(一六四〇)

「宝玉鑛石考」二卷(一六四七)



71-74: Laet, Joannes de, 1593 - 1649.

géographe flamand, directeur de la Compagnie des Indes, né à Anvers, mort dans la même ville en 1649. Très-versé dans l'histoire et la géographie, il a laissé des Descriptions de diverses parties du monde, écrites avec beaucoup de soin et d'exactitude. Les géographes venus après lui ont beaucoup profité de ses travaux, parmi lesquels nous citerons: Gallia, sive de Francorum regis dominiis et opibus commentarius (Leyde, 1629, in-32); Hispania, sive de regis Hispaniae regnis et opibus commentarius (Leyde, 1629, in-32); Belgii confederati respublica (Leyde, 1630, in-32); De imperio magni Mogolis, sive India vera (Leyde, 1631, in-32); Persia, sive regni Persici status variique itinera excerpta (Leyde, 1633, in-32); Portugalia (Leyde, 1641, in-32); tous ces ouvrages font partie de la collection des Petites républiques, publiées par les Elzéviros; Novus orbis seu descriptionis Indiae occidentalis libri XVIII (Leyde, 1633, in-fol.), traduit en français sous ce titre: Histoire du nouveau monde (Leyde, 1640, in-fol.); De gemmis et lapidibus libri duo (Leyde, 1647, in-8°), etc.

(P. Larousse: grand dictionnaire universel).

フランドルの地理学者。インド会社の頭取。アンウエールに於て生れ 同市に於て 1649年に死んだ。歴史と地理とに非常に造詣が深く、世界の諸地方の描寫を残した。これ等は非常に心をこめて正確に書かれたものである。彼の後に来た地理学者は彼の著作から大いに得るものがあつた。その中で次のものが挙げられる: カリヤ即ちフランス王の領土と権力に関する記録 (Leyde, 1629, in-32); ヒスパニヤ即ちスペイン王の王國と権力に関する記録 (Leyde, 1629, in-32); ベルギー聯邦共和國 (Leyde, 1630, in-32); 大モコール帝國即ち、真のインドについて (Leyde, 1631, in-32); ペルシヤ即ちペルシヤ王國の狀態及旅程誌 (Leyde, 1633, in-32); ホルトカル (Leyde, 1641, in-32); これらの作品のすべては、エルセウイルによって發行された Petites républiques 叢書に収録されてゐる。; 新しい國即ち西インド地方の敘景: XVIII卷 (Leyde, 1633, in-fol.), フランス語訳の題は、新世界史 (Leyde, 1640, in-fol.); 宝玉 礫石考 二卷 (Leyde, 1647, in-8°), 等。

挿入文書

ラエ

「フランスの地理学者。インド会社の頭取。史と地理とに非常に造詣が深く、世界の諸地方の「描寫」も残した。この筆は心もこみ、正確に書かしたもので、そのほか地理学者を大いに裨益した。その中で次のものが挙げられる。

「カリヤ即ちフランス王の領土と兵力に関する記録」(一六三九)

「ヒスパニヤ即ちスペイン王の王国と兵力に関する記録」(一六三九)

「ベルギー聯邦共和国」(一六三〇)

「大モロコシ帝國即ち真のインドについて」(一六三一)

「ペリシヤ即ちペリシヤ王國の狀態及旅程」(一六三三)

「オランダ」(一六四一)

「新ハ國即ち西インド地方の敘景」十八卷(一六三三)

フランス語の題は「新世界史」(一六四〇)

「宝玉礫石考」二卷(一六四七) 外。

帝國主義研究  
——  
略歴 明二六生 東大法政學部卒  
現職 東大經濟學部教授  
著者 植民及殖民政策  
南洋群島の研究  
帝國主義研究  
日本の優を論ずる

會員編號 A 208005

昭和十三年四月一日 第一期發行  
昭和十四年六月一日 第二期發行  
定價二百五十圓  
著者 矢野龍一  
發行所 東京市代田區神田保町三ノ二  
發行部 增永 櫻吉  
印刷所 東京市代田區九段二丁目一  
印刷部 保科 清春  
發行所 東京市代田區  
神田保町三ノ二  
會社 白書院  
電話 九段四三三八番

日本印刷工業株式會社印刷・桂川製本

挿入文書

75. La Fontaine, Jean de, 1621 - 1695.

フランス十七世紀大作家の一人。シャンパーニュ州シャトーティエリに生る。故郷に幼時を過ごし公立中卒を卒業後オラトリオ教会に属したが、マロ『アストレ』等を讀んで神学を學ばず二年半にして聖職を去り、治水管林行政官たりし父の職を襲つて気樂な田園生活を送る。1657年大蔵卿フーケの抱え詩人となり、及んで『アドニス』、『ウオーに夢む』等多くの詩歌を矢継早に發表して優雅典雅の詩人としてパトロンの愛顧を受け、フーケ失脚に際しては『ウオーの水汲女に戀する悲歌』(1661)を詠じた。流謫のフーケに随伴してリムーザン旅行の後、オルレアン大公妃附として宮廷に仕仕、ラレーヌ、ボワロー、モリエールとの交友を得て、「今や一歩たりとも自然を離るべからず」の古典主義信条の下に『寓話詩(ファーブル)』第一輯(1668)を世に向けた。『小譚詩(コント)』(1664-75)、小説『アンケとキュピトンの恋物語』(1669)もこの頃の作。大公妃の死後才媛ラ・サブリエール夫人の庇護の下に経済的安定と享受をつ、徐ろに『寓話詩』第二輯(1678)を突らせた。最も円熟せる時期の詩人を示すもの。ルイ十四世の及封に遭つて延期されてゐたアカデミー入りが許された後、『フィレモンとボリス』他一篇の物語詩、『フィレンツェ人』、『魔法の壺』等の喜劇、抒情悲劇一篇、その他数劇脚本等を著す。『ユエに與へる尺牘詩』(1687)に於ては古代人近代人論争の古代派に與する者として、カリシアーラテンの巨匠達に對して謙虚と矜持を併せ持つべきを説くが、この詩人に謹嚴なアカデミシヤンの同輩を想像するのは當らぬ。七十二才で病を得、宗教と和解し、ラ・サブリエール夫人に先立たれて後ロンドンの知友に招かれし應せず、テルヴァル夫人の許に身を寄せ、『寓話詩』最終卷(1694)を出し、詩篇、聖歌若干の翻訳を残して七十五才ハリに死す。

彼の放心は多くの逸話によつて有るであり、世間的義務を無視する

不羈にして息情な夢想家、虚心に自由と自然と讀者と受ける暢気者(ボム)の姿が傳へられてゐるが、時事問題等にも決して無関心ではなく、時にラ・ロシュフー流の犀利な人性洞察力をも發揮する。彼の作品は、無技巧の技巧を秘めた境まぬ傑作の成果であつて、少くともその最良の部分に於ては、詩興に乗つて規矩を越え、慎重のあまり余韻を殺さぬ純正な古典主義的好尚を美しく生かしたものと云ひ得るのであるが、他面、古典派によつて比較的閑却された中世ファブリエ、十六世紀ラフレ等の所謂「クール」精神を、柔軟自在、多様且つ醇平、音樂的且つ繪画的な詩句の中に、味ひ豊かな古語と交へて躍動せしめ、文字史上独歩の地位を占める。

〔寓話詩〕 Les Fables. 第一輯(第一卷より第六卷) 1668年、第二輯(第七卷より第十一卷) 1678-9年、第十二卷 1694年。ラ・フォンテーヌ晩年の代表作。その獨創性はサントーヴの云へる如く「素材の中にはなく、表現の中に存」し、大部分の寓話は古今東西の源泉から題材を仰ぐ。これらの借用せる素材の理解と取扱ひに於て、彼はあらゆる後續的企図を絶つ如き手腕を發揮し、こゝにテーヌの所謂「詩的寓話」を完成してゐる。しかも第一輯より第二輯に移るにつれて、作者の素材解釈力は愈々深く素材の肉附けは愈々豊かに第一輯に於ては簡潔を旨とするアイソポス寓話の影響に加ふるに、古典盲従の批評家パトリユの牽制もあつて十分に自己を發揮出来なかつた詩人は、第二輯に至つて東洋寓話よりの取材と機縁に、物語の展開に於ても又作者の自らを寓話の中に表はす度合に於ても、より奔放自在に振舞つてゐる。『寓話詩』の魅力、そして又寓話のジャンルに於て彼が爲した最大の変革は先づ此の主観性に存する。然し同時に『寓話詩』は客觀の藝術としても作者自らの定義、「様々の百幕より成る雄大な劇」たるに相應しい眞実さと包容性を持つ。ラ・フォンテーヌの舞台は生氣に溢れてゐる。登場人物はすべて生

あつた、如く動き且つ語る。彼らは動物としての特有な外観及び  
性格を持つと同時に人間の象徴でもあつて、「生物界に於て（ラ  
フオントーヌの動物）なる別個の一種属を形成する」（A. Hallays）  
かくて、当時フランス十七世紀の各社会層が描かれることになる。  
『寓話詩』がモリエールの喜劇、ラ・フリエールの『人さまざま』  
等と相通する興味を有する所以、更に又時と場所の特殊相  
を遂して永遠普遍の人間像を捉へんとするフランス文学傳統の  
正しい精神の一例證たる所以である。（山田喬より）

（河出書房 世界文学辞典）

76. La Fosse, Antoine de, sieur d'Aubigny, 1653 - 1708.

poète, né à Paris vers 1653, mort dans la même ville en 1708. Pendant un séjour qu'il fit à Florence, comme secrétaire de Foucher, il composa des poésies italiennes et fut admis à l'Académie des artistes, où il prononça un discours sur ce sujet: Quels sont les yeux les plus beaux, des bleus ou des noirs? La Fosse se tira de ce sujet délicat aux applaudissements de son auditoire féminin, en se prononçant pour les yeux qui expriment le plus de tendresse. Par la suite, il assista à la bataille de Luzara, où fut tué le marquis de Créquy (1702), et rapporta à Paris le cœur de ce général. Enfin, La Fosse gagna la protection du duc Louis d'Aumont, qui le nomma secrétaire général du Boulonnais. Il était très-versé dans la connaissance de l'antiquité, et il acquit de son temps une assez grande réputation comme auteur tragique. On lui doit les tragédies intitulées: Polyxène (1686); Manlius Capitolinus (1698); Thésée (1700); Cerésus et Callirhoé (1703). Trois de ces pièces sont très-faibles mais Manlius, dit La Harpe, «est une véritable tragédie: tous les caractères sont parfaitement traités; ils agissent et parlent comme ils doivent agir et parler; l'intrigue est menée avec beaucoup d'art et l'intérêt gradué jusqu'à la dernière sci-

7. 7才人  
 詩人。バリエリ、同地、死んじ。  
 Foucherの詩書と一ツロビンに譯せらる  
 同にハコト詩と許す。aphartistsのPo  
 テミニに不念と許す。1才0才ハAugara  
 の戦陣に参加した。兄弟は、ハコト、ハ  
 の保護を得。7才0才ハ神書課長に任命  
 された。彼は古典に關する知識が甚だ深  
 悲劇作家としてハコトは如神と傳へら  
 した。悲劇作品は世  
 Polyxène (1686)  
 \*17才  
 Manlius Capitolinus (1698); \*7才 (1700);  
 Cerésus & Callirhoé (1703) \*17才  
 \*17才  
 Manlius  
 本格的な悲劇。人物は十  
 へ完全に扱はれ、当進行動一語。(7才)  
 進行動一語。筋は非常に巧に導か  
 無味は最佳の場面。次第に高まる。  
 ほかの著作として「Foucherの才」  
 地方の秘訳(1704)「ハコト怪談の巻」  
 題す。許篇「一篇の」見事とされた。P=才

3才人  
 3向  
 1  
 3  
 2  
 2  
 2  
 3才  
 5才  
 6  
 1700  
 17  
 5  
 4才  
 1才  
 15  
 1

76. La fosse, Antoine de, sieur d'Aubigny, 1653 - 1708.

poète, né à Paris vers 1653, mort dans la même ville en 1708. Pendant un séjour qu'il fit à Florence, comme secrétaire de Foucher, il composa des poésies italiennes et fut admis à l'Académie des apatistes, où il prononça un discours sur ce sujet: Quels sont les yeux les plus beaux, des bleus ou des noirs? La fosse se tira de ce sujet délicat aux applaudissements de son auditoire féminin, en se prononçant pour les yeux qui expriment le plus de tendresse. Par la suite, il assista à la bataille de Luzara, où fut tué le marquis de Créquy (1702), et rapporta à Paris le cœur de ce général. Enfin, La fosse gagna la protection du duc Louis d'Aumont, qui le nomma secrétaire général du Boulonnais. Il était très-versé dans la connaissance de l'antiquité, et il acquit de son temps une assez grande réputation comme auteur tragique. On lui doit les tragédies intitulées: Polyxène (1686); Manlius Capitolinus (1698); Thésée (1700); Corésus et Callirhoé (1703). Trois de ces pièces sont très-faibles, mais Manlius, dit La Harpe, «est une véritable tragédie: tous les caractères sont parfaitement traités; ils agissent et parlent comme ils doivent agir et parler; l'intrigue est menée avec beaucoup d'art et l'intérêt gradué jusqu'à la dernière sci-

詩人、1653年頃パリに生れ、同地で1708年に死んだ。Foucherの秘書としてフロレンスに滞在してゐる間にイタリア語の詩を創り、Apatistesのアカデミーに入会を許された。そこで彼は「碧い眼と黒い目と、何れが美しいか」といふ題で講演した。La fosseは優しさを最もよく表現する目の味方であると宣言することによつて、女性の聴衆の大かつさいを博してこの微妙なテーマを處理した。次に彼は、Créquy侯爵が戦死したLuzaraの戦闘に参加し(1702)、この將軍の心臓をパリに持ち歸つた。最後にLa fosseはルイ・ドゥモン公の保護を得、ブーロネのsecrétaire général(長官?)に任命された。彼は古典に因する造詣が甚だ深く、悲劇作家としてもかなりの名声を博してゐた。彼の悲劇には「Polyxène」(1686);  
ポリクセーヌ

Manlius Capitolinus (1698); 「テセ」(1700); Corésus et Callirhoé (1703)がある。以上の内三篇は甚だ貧弱なものである。しかしManliusは、ラ・アルプーによれば「本格的な悲劇である。人物はすべて完全に扱はれてゐる。人物は当然行動し、語るべきやうに行動し語つてゐる。筋は非常に巧に導かれ興味は最後の場面まで次第に高まる。」



フ・フオス

詩人。パリで生れ、同地で死んだ。

Toucherの秘書としてフロランスに滞在してある間にイタリヤ詩を嗜み、apatistesのファミリーに会合を許された。一七〇二年Luzaraの戦闘に参加した。その後ルイ・十四世の保護を得、フ・ロ・ヌの <sup>secrétaire général</sup> 秘書課長に任命された。彼は古典に関する造詣が甚だ深く、悲劇作家として、かなりな名手も博した。

悲劇作品には Polyxène (1686);

Mamilius Capitolinus (1698); 「テセ」 (1700);

Corésus & Callirhoé (1703) のあり、その内三篇

は甚だ貧弱なものである。Mamilius は、アリアによれば「本格的な悲劇」。人物はすべて完全に扱はれ、当然行動一語も(まやうに)行動一語もなす。筋は非常に巧に導かれ、興味は最後の場面まで次第に高まる。その他の著作としては「アタシオンのオード」の拙劣な訳(一七〇四)、クシキ侯爵の墓、と題する詩篇、一篇の「見舞こらしたるアリア」

フ・フオス 2

といふ歌謡、「オード」、田園詩、<sup>悲歌</sup>、<sup>作品集は</sup>諷刺詩、「アドリアン」等がある。一八一一年パリで発行された。

帝國主義研究  
 著者 岡田六生 東大法政學部  
 略歴 現職 東大経済学教授  
 著者 南澤群島 南澤群島の研究  
 帝國主義研究  
 著者 日本の偽を露す者

會員番號 A 208006  
 昭和二十三年四月一日 第一期發行  
 昭和二十四年六月一日 第二期發行  
 定價二百五十圓  
 著者 矢内原忠雄  
 發行所 東京千代田區神田區三ノ木  
 增永要吉  
 印刷者 保科清春  
 白日書院  
 電話九段四三三八番

日本印刷工業株式会社印刷・桂川製本

帝國主義研究  
 著者 岡田六生 東大法政學部  
 略歴 現職 東大経済学教授  
 著者 南澤群島 南澤群島の研究  
 帝國主義研究  
 著者 日本の偽を露す者

會員番號 A 208006  
 昭和二十三年四月一日 第一期發行  
 昭和二十四年六月一日 第二期發行  
 定價二百五十圓  
 著者 矢内原忠雄  
 發行所 東京千代田區神田區三ノ木  
 增永要吉  
 印刷者 保科清春  
 白日書院  
 電話九段四三三八番

日本印刷工業株式会社印刷・桂川製本

挿入文書

ne. » On doit encore à Lafosse : une médiocre traduction des Odes d'Anacréon (1704), un poème intitulé le Tombeau du marquis de Créqui, une cantate, Ariane abandonnée, des Odes, des Idylles, des Elégies, des Epigrammes, des Madrigaux, etc. Ses Oeuvres ont été réunies et publiées (Paris, 1811, 2 vol. in-8°). (P. Larousse : grand dictionnaire universel)

又、Lafosseの著作としては、アナクレオンのオードの拙劣な翻訳(1704)、クレキ侯爵の墓と題する詩篇；一篇の「見棄てられたるアリプス」といふ歌謡；オード；田園詩；悲歌；諷刺詩；マドリカル等がある。彼の作品集は集成<sup>1807年</sup>発行されている。(パリ、1811、2 vol. in-8°)

78. Leo Africanus, Joannes, 16th cent.

eigentlich Hasan ibn Mo-hammed al-Wassân,  
maurischer Geograph aus Granada, \* um 1494,  
† um 1550 Tunis (?), bereiste seit 1508 Norda-  
frica und Westasien, wurde um 1520 als Gefan-  
gener von Seeräubern dem Papst Leo X. geschenkt,  
wurde in Rom Christ (trat später zum Islam  
zurück). Sein Hauptwerk ist die ursprünglich  
arabisch verfasste, 1526 ins Italienische über-  
setzte Beschreibung Afrikas (zuerst von Ramu-  
sio 1550 veröffentlicht; deutsch von Lorisbach,  
1805).

(Meyers Lexikon)

本名は Hasan ibn Mo-hammed al-Wassân. ムール  
人の地理学者。グラナダに於て 1494年生れ。1550年42  
=スレ(?) 没。1508年以後北アフリカと西アジアを旅行。1520  
年に海賊の捕虜として法王レオ10世のところに送りこまれた。  
ローマでキリスト教信者となった(後イスラム教に歸す)。  
著書は本来アラビア語で書かれた。1526年イタリア語に翻訳  
された。アフリカの記述。(はじめは 1550年にラムシオから發  
行された。ドイツ語では ロルスバハから 1805年發行)。

79. Le Vasson, Michel, 1646 - 1718.

Historien et théologien français, né à Orléans vers 1648, mort dans le comté de Northampton en 1718. Membre de la congrégation de l'Oratoire, il publia, en 1688, un *Traité de la véritable religion* qui lui attira des remontrances de la part de ses supérieurs. Blessé de ces reproches, il quitta l'ordre et se retira en Hollande en 1695, puis passa en Angleterre, où il adopta les principes de l'Eglise anglicane. A la demande du docteur Burnet, il obtint du roi Guillaume une pension, et lord Portland le combla des plus chaleureuses marques d'amitié. Malheureusement ses protecteurs l'abandonnèrent après la publication de son *histoire de Louis XIII*, et on pense que Le Vasson finit ses jours dans une situation malheureuse, sinon dans une indigence absolue. Ses principaux ouvrages sont : *Traité de la manière d'examiner les différends de religion* (Amsterdam, 1697, in-12); *Apologie de l'Eglise anglicane*; *Histoire de Louis XIII, roi de France, contenant les choses les plus remarquables arrivées en France et en Europe depuis la feinte abolition de la Paulette jusqu'à la condamnation d'un livre de Santarel, jésuite* (Amsterdam, 1700-1711 et 1750, 10 tomes en 20 vol. in-12; Amsterdam [Paris],

フリスの「史家・神学者」  
 一六八八年に  
 「真の宗教に関する試論」を發行し、先導道が  
 困難と交々、それに偏せらるゝ修道會も  
 あり。一六九五年 フリスに引退した。次  
 で、フリスに渡り、フリスの教會の主義  
 を奉じた。Burnet 博士の進言により、フ  
 リス王から年金を幾許、又 Portland 卿  
 は彼に熱意ある同情を以て、一六九三  
 年の「史を發表した後は保護者達に見  
 棄つるが、不運な境遇で一生を終つた」  
 此著は「宗教上の争論を檢討する方法  
 について」(一六九七)、「東国國教會辯議」  
 「フリス王の十三世史」ポルトガルの偽傳  
 廢止の「シエント・増刊の著書收  
 收に至る間、フリス及ポルトガルの  
 最も注目すべき事件も含め、(一七〇〇-一七一  
 一) 及一七五〇)

ル・サント

生れ  
 道會  
 先  
 修道  
 リス  
 博  
 又、  
 にも、  
 後に  
 底と  
 と  
 3分  
 國  
 法  
 にも  
 へ、  
 0、  
 10、

79. Le Vassor, Michel, 1646 - 1718.

Historien et théologien français, né à Orléans vers 1648, mort dans le comté de Northampton en 1718. Membre de la congrégation de l'Oratoire, il publia, en 1688, un Traité de la véritable religion qui lui attira des remontrances de la part de ses supérieurs. Blessé de ces reproches, il quitta l'ordre et se retira en Hollande en 1695, puis passa en Angleterre, où il adopta les principes de l'Eglise anglicane. A la demande du docteur Burnet, il obtint du roi Guillaume une pension, et lord Portland le combla des plus chaleureuses marques d'amitié. Malheureusement ses protecteurs l'abandonnèrent après la publication de son histoire de Louis XIII, et on pense que Le Vassor finit ses jours dans une situation malheureuse, sinon dans une indigence absolue. Ses principaux ouvrages sont : Traité de la manière d'examiner les différends de religion (Amsterdam, 1697, in-12); Apologie de l'Eglise anglicane; Histoire de Louis XIII, roi de France, contenant les choses les plus remarquables arrivées en France et en Europe depuis la fautive abolition de la Paulette jusqu'à la condamnation d'un livre de Santarel, jésuite (Amsterdam, 1700-1711 et 1750, 10 tomes en 20 vol. in-12; Amsterdam [Paris],

フランスの歴史家、神学者。1648年頃 オルレアンに生れ Northampton 伯爵領にて 1718年死す。オラトリオ修道会員として 1688年に「真の宗教に関する試論」を發行し、先輩達から忠告を受けた。この非難に傷つき、彼は修道会を去り、1695年にオランダに引退した。次いでイギリスに渡り、アンリカン教会の原則を採用した。Burnet 博士の進言によつて、彼は William 王から年金を得た。又、Portland 卿は彼に熱意ある友情を示した。不幸にも、彼の保護者達は、彼がルイ十三世の歴史を發表した後に、彼を見棄てた。Levassor は、全く貧窮のどん底とはいへぬまでも、不運な境遇でその一生を終へたと考へられてゐる。主著は：「宗教上の争論を檢討する方法について」(アムステルダム 1697, in-12); 「英國国教会辯護」; 「フランス王ルイ十三世史：ホーレット法への稱賛止より、イエズイット僧サンタレルの著書没収に至る間のフランス及ヨーロッパに發生せる最も注目すべき事件を含む」(アムステルダム, 1700-1711, 及 1750, 10 tomes en 20 vol. in-12; アムステルダム (1811),

ル・ウアソール

フランスの「史家・神学者」。  
 オトリオ修道会員であったが、一六八八年に  
 「真の宗教に関する試論」を發行し、先輩達か  
 ら非難を受け、それに傷けられて修道会を  
 去り、一六九五年オランダに引退した。次い  
 てイギリスに渡り、アングリカン教会の主義  
 を奉じた。Burnet 博士の進言によつてウ  
 イリアム王から年金を受け、又 Portland 卿  
 は彼に熱意ある友情を示したが、ルイ十三  
 世の「史」を發表した後は、保護者座に見  
 棄てられ、不運な境遇で一生を終つた。

主要著は、「宗教上の争論を檢討する方法  
 について」(一六九七)、「英国国教会辯護」、  
 「フランス王ルイ十三世史」、ポルシツト法の偽稱  
 廢止より、ジエズイット僧サンテレルの著書沒  
 收に至る間のフランス及ヨーロッパに發生せ  
 る最も注目すべき事件を含む。(一七〇〇—一七  
 一五)

ル・ウアソール 2

ウアソールは、よき史家の判断を失つて  
 誤とし、「単にいとふべし演説師にすぎぬ」  
 と評してゐるが、シスモンティによれば、ル  
 ・ウアソールは常に政治的宗教的な自由に  
 對する熱烈な愛と、傷らぬ感情をもちま  
 と懐いてゐるといふ。

—帝國主義研究—  
 著者 略歴 明二天生 東大法學部卒  
 現職 東大經濟學部教授  
 著者 植民及植民政策  
 南洋群島の研究  
 帝國主義研究  
 日本の傷を醫す者

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
 昭和二十四年六月一日 第二刷發行  
 定價二百五十圓  
 著者 矢野龍一 內田忠雄  
 發行者 東京都千代田區神田區三ノ二  
 增永 稟吉  
 印刷者 東京都千代田區九段二丁目一  
 保科清春  
 發行所 東京都千代田區  
 神田區三ノ二  
 株式會社  
 白日書院  
 電話九段四三三八番

日本印刷工業株式會社印刷・桂川製本

—帝國主義研究—  
 著者 略歴 明二天生 東大法學部卒  
 現職 東大經濟學部教授  
 著者 植民及植民政策  
 南洋群島の研究  
 帝國主義研究  
 日本の傷を醫す者

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
 昭和二十四年六月一日 第二刷發行  
 定價二百五十圓  
 著者 矢野龍一 內田忠雄  
 發行者 東京都千代田區神田區三ノ二  
 增永 稟吉  
 印刷者 東京都千代田區九段二丁目一  
 保科清春  
 發行所 東京都千代田區  
 神田區三ノ二  
 株式會社  
 白日書院  
 電話九段四三三八番

日本印刷工業株式會社印刷・桂川製本

挿入文書



1757, 7 vol. in 4°). D'après Voltaire, on doit considérer comme erronés tous les jugements de cet historien, qui ne serait « qu'un déclamateur odieux. » Il est vrai que Levassor, quand il parle de Louis XIV, n'a pas pour lui les mêmes complaisances que le patriarche de Ferney; mais, selon Sismondi, Levassor est toujours animé d'un sentiment honnête et d'un ardent amour pour la liberté politique et religieuse.

(P. Larousse. G. D. W.)

1757, 7 vol. in 4°). ヴォルテールによれば「この史家の判断はすべて誤つてみると着なされねはならぬといふ。ヴォルテールによれば「この史家は「単にいと小へき演説師に過ぎない」。Levassorは確かに1714+4世について語るとき、Ferneyの長老と同じ讃辭を述べはしなかつた。(カシスモンディによれば「Levassorは常に、政治的宗教的自由に対する熱烈な愛と、偏らぬ感情を呈せしめと保つておるといふ。

80-83. Linné, Carl von; 1707-1778.

Swedish Botanist. Råshult (in the province of Småland, Sweden) に、教師の子として生る。1727年 Wexjö の primary school に入学、1724年 gymnasium に通入。聖職者たるべく教育されたが、botany に傾中して進歩を示す。1726年には、tailor の shoemaker の徒弟にされたが、まじらわいた。町の内科医 Dr Rothman が、medicine 及び natural history に於ける彼の素質を見出し、physiology を教授してくれた。1727年 the university of Lund に入学した。翌年 Upsala 大学に移った。経済的に困窮したため、1729年、当時 Hierobotanicon と著作中の、theology 教授 Dr Olaf Celsius (1670-1756) と近付きになり board and lodging を提供された。この時期に Sébastien Vaillant の *Sermo de Structura Florum* (Leiden, 1718) の <sup>review</sup> 評論を読み、それによって、後年彼の植物分類の artificial system が確立された。この評論によつて、彼は、花の雄蕊と雌蕊を調べたため、このの忠告が甚だ重要である事と信するに至り、それに基づき system of arrangement をたてよと考へた。Wallin の *Tápos φύτων, sive Nuptiae arborum Dissertatio* (Upsala, 1729) を手に入り、彼は、植物の性についての小論文を書いたが、それによって、今大学の植物学教授 younger Olaf Rudbeck の手に渡った。翌年 Olaf Rudbeck の adjunctus に任ぜられ、1730年春から講義と始めた。The academic garden を改造し、多くの珍種を加へた。

1732年、the Academy of Sciences of Upsala の費用で、Lapland の踏査を企て、4600 m. 余を跋涉した。彼自身の報告は 1811年 Sir J. E. Smith によって英語で出版された(題は *Lachesis Laponica*)。the scientific results は彼の *Flora*

ニニクカ一  
入工一丁の植物学者。教師の子に生れ、  
聖職者たるべく教育されたが、植物学に傾中  
して進歩を示す。十八、九才頃には徒弟養育  
院に出入りした。町の内科医 Rothman  
が、医学及博物学に於ける彼の素質を見出し、  
physiology を教授してくれた。1727年  
Lund 大学に入学した。翌年 Upsala 大学に  
移った。この時期に Sébastien Vaillant の  
*Sermo de Structura Florum* (1718) の評論を読み、  
それによって、後年彼の植物分類の artificial  
system が確立された。この評論によつて、  
彼は、花の雄蕊と雌蕊を調べたため、このの忠告  
が甚だ重要である事と信するに至り、それに基づ  
き system of arrangement をたてよと考へた。  
Wallin の *Tápos φύτων, sive Nuptiae arborum*  
*Dissertatio* (Upsala, 1729) を手に入り、彼は、  
植物の性についての小論文を書いたが、それによ  
つて、今大学の植物学教授 younger Olaf Rudbeck  
の手に渡った。翌年 Olaf Rudbeck の adjunctus  
に任ぜられ、1730年春から講義と始めた。The  
academic garden を改造し、多くの珍種を加へた。  
1732年、the Academy of Sciences of Upsala の  
費用で、Lapland の踏査を企て、4600 m. 余を  
跋涉した。彼自身の報告は 1811年 Sir J. E.  
Smith によって英語で出版された(題は *Lachesis*  
*Laponica*)。the scientific results は彼の *Flora*  
Lapland の踏査を企て、4600 m. 余を跋涉した。  
1732年、the Academy of Sciences of Upsala の費用で、  
Lapland の踏査を企て、4600 m. 余を跋涉した。彼自身の報告  
は 1811年 Sir J. E. Smith によって英語で出版された(題は *Lachesis*  
*Laponica*)。the scientific results は彼の *Flora*

80-83. Linné, Carl von, 1707-1778.

Swedish Botanist. Råshult (in the province of Småland, Sweden) に、牧師の子として生る。1717年 Wexjö の primary school に入学、1724年 gymnasium に進んだ。聖職者として教育されたが、Botany に傾中して進歩を示す。1726年には、tailor or shoemaker の徒弟にさせた方がよいと云わせたが、町の内科医 Dr Rothman が、medicine 及び natural history に於ける彼の素質を見出して、physiology を教授して貰った。1727年 the university of Lund に入学したが翌年 Upsala 大学に移った。経済的に困窮したため、1729年、当時 Hierobotanicon と著作中の、theology 教授 Dr Olaf Celsius (1670-1756) と近付きになり board and lodging を提供された。

この時期に Sébastien Vaillant の Sermo de structura Florum (Leiden, 1718) の <sup>a review</sup> 評論を読み、それによって、後年彼の植物分類の artificial system が確立された。この評論によつて、彼は、花の雄蕊と雌蕊を調べた。これらの器官が甚だ重要である事を信ずるに至り、それに基づいて a system of arrangement とたてよと考へた。Wallin の Támos φύτων, sive Nuptiae arborum Dissertatio (Upsala, 1729) の手に入り、彼は、植物の性についての小論文を書いたが、それによって、今大学の植物学教授 younger Olaf Rudbeck の手に渡った。翌年 Rudbeck の adjunctus に任ぜられ、1730年春から講義を始めた。The academic garden を改造し、多くの珍種を加へた。

1732年、the Academy of Sciences of Upsala の費用で、Lapland の踏査を企て、4600 m. 余を跋涉した。彼自身の報告は 1811年 Sir J. E. Smith によつて英語で出版された (題は Lachesis Laponica)。the scientific results は彼の Flora

花の構造についての話。

植物の価値 論文 又は、樹木の価値

リンネ カール

スウェーデンの植物学者。牧師の子に生れ、  
聖職者として教育されたが、植物学に熱中  
して進歩を怠らず、十八、九十年には徒弟奉  
公にあたり、その時、町の外科医 Rothman  
が、医学及博物学に於ける彼の素養を見出  
して生理学を教授してくれた。一七二七年  
Lund 大学に入学して、翌年のアウプス大学に  
移った。

その頃 Sebastian Vaillant の Sermo de  
Structura Florum (1718) の評論をもとに、  
そのおかしな、後年彼の植物学体系の基礎  
体系が確立した。また Wallin の Taxos  
pvtiv, sive nuptiae arborum Dissertatio (1729)  
が年に入り、植物の性についての論議も書  
かれた。今大学の植物学教授の目にも、  
先 Rudbeck の如年には、一七三〇年春の  
講義を始めた。

一七三二年のアウプスの Academy of Sciences の  
員で Lapland の踏査を命じ、四年の間に、

リンネ ヨ

踏査した。彼自身の報告は一八二二年 Sir  
J. E. Smith による書籍で出版された。又その  
科学的成果は彼の Flora Laponica (1737)  
に發表された。Dalecarlia の <sup>Gullmar</sup> 領地を  
その領地を踏査、一七三五年には外國で M. D.  
の学位をもつて Harderwijk に移った。Haarlem  
も理て Leiden に移り Jan Fredrik Gronovius  
と訪ねた。Gronovius は後に Systema naturae  
を原稿を見て、Systema naturae 自ら  
費して出版した。この有名な体系は、人為的  
ではあるが、従来の混乱を秩序立て、その明  
確な見事な法則と解説により、大成功  
した。アウプス大学の植物学教授 J. Burman  
に命じ、十二月廿二日に Fundamenta  
Botanica を出版した。一七三六年、  
大いに Genera Plantarum の印刷を完成。  
この書は近代の分類植物学の礎石、  
一七三七年 the Hortus Cliffortianus に  
記述された。Clifford の植

帝國主義研究  
——  
略歴 田代六吉 東大法政學部  
著者 田代六吉 東大法政學部教授  
南洋羣島の研究  
帝國主義研究  
日本の傳を整理する

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
昭和二十四年六月一日 第二刷發行  
定價二百五十圓  
著者 矢野龍一 內田忠雄  
發行所 東京千代田區神田區三ノ木  
增永 翠吉  
印刷者 保科清春  
東京千代田區九段二丁目一  
白 日 書 院  
電話九段四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・梓川製本

帝國主義研究  
——  
略歴 田代六吉 東大法政學部  
著者 田代六吉 東大法政學部教授  
南洋羣島の研究  
帝國主義研究  
日本の傳を整理する

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
昭和二十四年六月一日 第二刷發行  
定價二百五十圓  
著者 矢野龍一 內田忠雄  
發行所 東京千代田區神田區三ノ木  
增永 翠吉  
印刷者 保科清春  
東京千代田區九段二丁目一  
白 日 書 院  
電話九段四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・梓川製本

挿入文書

リンネ 3

物コリンネの合集整理も終った。その編集  
 の片手間に the Critica Botanica を著し、之もオ  
 フスタで出版した。他何れに敵し、常備がことだ  
 又同地音の空気の合はるゝたので 郵船で  
 出版した。途中、オフスタに一年留り Classes  
Plantarum (一七三〇) も出版した。同年スウェー  
 デンに内務大臣として 定任。一七四一年から二  
 医学教授。その後、いく 植物学教授にはせられ  
 た。国家を命じて Åland と Gothland を旅行。そ  
 の結果を Åländska och Gothländska Resa (一七四五)  
 として 発行した。(この書も、オフスタには 字名  
 命名法に於ける 種名の 最初の使用が見られる)  
 一七四五年に Flora Suecica 及び Fauna  
Suecica も 発行。後者は 十五年も 費した 著  
 作。その後、スウェーデン 旅行中に 多くの 観察  
 を 収めた。二冊 Wästgöta Resa (一七四七) 及び  
Skånska Resa (一七五二) の 出版された。一七四八年  
Hortus Upsaliensis を 著した。(この園に 彼は  
 四百種以上の 栽培した)。一七五〇年  
Philosophia Botanica の 著においた。この時期の 最

リンネ 4

の 重要な 著作は Species Plantarum (一七五三)  
 である。種名が 網羅されてゐる。同年、スウェーデンの 科  
 字名として 最初に knight of the Polar Star  
 に 叙された。一七五七年 以降、名門に 列せられた。  
 その他 Genera Myrtilorum についての 論著も  
 あり、発行された 著作は 百に 十数に 上る。多  
 くの 誤りもある。属と種、を 判然と 示し  
 る 原則も 最初に 明言した 功績と、<sup>根</sup> 徹一貫  
 した 種名の 使ひ方とは 永く 残る 価値あり  
 である。

帝國主義研究  
——  
歷 明二六生 東大法學部卒  
現職 東大經濟學部教授  
著者 植民及殖民政策  
南洋群島の研究  
帝國主義研究  
日本の傷を醫する者

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
昭和二十四年六月一日 第二刷發行  
定價二百五十圓  
著者 矢野龍一 忠雄  
發行所 東京千代田區神田區神保町三ノ二  
增 永 要 吉  
印刷者 東京千代田區九段二丁目一  
保科清春  
白日書院  
電話九段四三三八番

日本印刷工業株式會社印刷・桂川製本

帝國主義研究  
——  
歷 明二六生 東大法學部卒  
現職 東大經濟學部教授  
著者 植民及殖民政策  
南洋群島の研究  
帝國主義研究  
日本の傷を醫する者

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
昭和二十四年六月一日 第二刷發行  
定價二百五十圓  
著者 矢野龍一 忠雄  
發行所 東京千代田區神田區神保町三ノ二  
增 永 要 吉  
印刷者 東京千代田區九段二丁目一  
保科清春  
白日書院  
電話九段四三三八番

日本印刷工業株式會社印刷・桂川製本

挿入文書

Lapponica (Amsterdam, 1737) に發表された。Dalecarlia の governor に招かれその領地を踏査し、その途次 Fahlum で大聴衆に講演し、その地の chaplain (後 bishop of Åbo) J. Bro-wallius (1707-1755) に熱心に勧められた。外国で M.D. の学位をとるべく 1735 年 Sweden を離れ、Harderwijk で試験を受け、向歌熱の原因についての彼の論文を defend した。Haarlem を経て Leiden に到り Jan Fredrik Gronovius (1690-1762) を訪ねた。Gronovius は後に Linné の Systema naturae を原稿で見せ、驚歎し自費で出版した。この有名な system は artificial ではあるが、従来の混乱を秩序立て、その lucid and admirable laws, & comments によって大変成功した。H. Boerhaave の推薦で、Amsterdam の植物学教授 J. Burman (1707-1780) に会ひ、12ヶ月共に居た。その間に Fundamenta Botanica を出版。an unassuming small octavo であるが、その影響は甚大であった。

1736年訪英。

Netherlands に戻って、Genera Plantarum の印刷を完成。この書は modern systematic botany の起点と見做されるべきもの。同(1737)年、the Hortus Cliffortianus に記述されている、Clifford の植物コレクションの分類整理を終へた。その編纂の片手間に the Critica Botanica を書き、之も Netherlands で出版した。絶句な激しい労働がこたへ、the Low Countries の atmosphere が合はなかつたので、歸郷すべく出発したが、途中 Leiden に一年留り、Classes Plantarum (1738) を出版、1741 を訪ねて Antoine and Bernard de Jussieu に会ひ、Sweden に歸つた。1738年9月内科医として Stockholm に定住。その後 naval physician に任ぜられ、1739年6月結婚。1741年 Upsala の medicine 教授に任ぜられた。同6年 botany にかはつた。同年 the state の命

「ラッポランドのフローラ」

「自然の分類法」

「植物学の根底  
基礎」

「植物の属」

「Clifford の庭園」

「植物学評論集」

「植物の綱」



今で Öland & Gothland を旅行、その成果を *Oländska och Gotländska Resa* (1745) として発行。この書の index には nomenclature に於ける specific names の最初の使用が見られる。

1745年には、*Flora Suecica* 及び *Fauna Suecica* を発行。後者は15年を費した著作。その後、Sweden 旅行中に為された observations を収めた二巻、*Wästgöta Resa* (Stockholm, 1747) 及び *Skånska Resa* (Stockholm, 1751) が出版された。1748年 *Hortus Upsaliensis* を発表 (その garden に彼は 1100 種を加へて栽培してゐた)。1750年 *Philosophia Botanica* の世に出た。この書は、1735年 *Fundamenta Botanica* の中に発表した種々の axioms に対する commentary である。此の時期の最も重要な著作は *Species Plantarum* (Stockholm, 1753) で、specific names が網羅されてゐる。同年、Knight of the Polar Star に叙された (Sweden に於てこの榮譽を受けた最初の科学者)。Uppsala 大学の学生は平常500人であるが、彼の植物学の講座を聴くために、世界各国から集つて3倍に増した。1757年以降名門に列せられた。1763年には tea-plant が枯木に Europe に傳へられて彼を喜ばせた。

彼には *Genera Morborum* についての論文もある。

多くの誤りもあるが、genera と species を判然と示した principles を最初に明言した功績と、彼の uniform use of specific names とは永く残るべきものである。

発行された著作は180余に上り、その中には *the Amoenitates Academicae* が数へられる。この書は彼の資料を供給し、校訂したものである。  
(E. B.)

「スウェーデンのフローラ」 「スウェーデンの

「ウプサラの庭園」  
「植物哲学」 (植物学の原理)

「植物の種」

「病気の種」

84. Locke, John, 1632—1704.

英國の哲学者。政治的不安な時代に Somerset 州に生れた。Oxford の Christ Church 学寮に入り、自然科学や医学を好んだ。1660年同大学のギリヤ語教授となり、続いて修辞学の講師、倫理学の教監となった。1667年 Anthony Ashley Cooper (後の Earl of Shaftesbury) に認められて、その侍医となり、同家に寄寓、公私共に Shaftesbury 伯を助けた。1672年 Shaftesbury が大法官となるや、その秘書官となった。1675年からフランスに留まる事四年、オランダにも行ったが、ここで後の英王 William III に知られ、晩年要職を與へられて静かな余生を送った。彼の哲学説は Kant の批評的經驗論に先鞭をつけたものである。即ち Bacon の認識論が字句の方法に対する考察に終わったのに反して、彼は今一步を進めて認識その物の起原及び限界にまで眼を注いだ。眞の意味に於て認識論は彼によつて始められた。Hobbes, Berkeley, Hume 等と共に英國の最も優れた、最も重要な哲学者である。J. S. Mill は彼を 'unquestioned founder of the analytic philosophy of mind' と呼んだが、彼の哲学が第十七、八世紀の思想界に及ぼした影響は非常に著しい。主著 *An Essay concerning Human Understanding* (1690) のほか、*Paraphrases of St. Paul's Epistles* (1705—7) 等がある。(英米文字辞典)



85. Lucretius Carus, Titus. (c. 98 - 55 B.C.)

the great Latin didactic poet. 生涯について知るには、その死後四世紀余を経て書かれた Jerome の Brief summary に由る外ない。Jerome は Lucretius の死後約二世紀を経て書かれた Suetonius の De Viris Illustribus (保存ない) の記事に従っているが、最初の sources は不明である。この記事によると彼は「95 B.C. に生れ、a love-philtre を用いた結果發狂し、平静期に數篇の作品を著し (それらは後に Cicero が修正)、四十四才の時自殺した。Domatus の Virgil 傳によれば彼は 55 B.C. 歿。Jerome の statements は、後年 Epicureanism の敵が作った fiction として信用されはしない。そんな強力な思想に一貫性をもった作品が狂人の平静期 (in the intervals of madness) に書かれたとは思へない。Epicurus 主義に反対であり Lucretius を正當に評価し得なかつた Cicero が、彼の未完の作品を誠意をもつて correct したといふ事も疑はしい。

しかし彼がその詩の中に extraordinary vividness をもつて、dreams や waking visions から受ける印象を敘する事を繰り返し、又、夢の中で途を探究し詩を作ると述べてゐる精神の不斷の緊張が推察される点などから、彼の發狂自殺も根據のない説ではないと考えられる。彼の詩の第一書は最初にもべらいた計画通り style も内容の arrangement もととのつてゐるが、第二書以下、殊に最後の三書は、argument の連続性が、しばしば最初の草稿が浄書された後に挿入されたらしい passages によつて破られ、又 lines の頻繁な繰返や、詩句の rough workmanship が見られるところから、この詩は作者の最後の校閲を経てゐない事が察せられる。印刷に附する爲に Cicero が眼を通した事も考へられはしない。

ローマの詩人。毒を飲ませた媚薬のために發狂、自殺したといはれる。彼は Epicurus の思想をローマに傳へ、Democritus の原子説を發展させた機械的世界觀を抱いた。六卷から成る哲學詩 De Rerum Natura (「物性賦」) によつて有名。(英米文字辞典)

ルクレチウス、カルス

ラテンの偉大な教訓詩作者。生涯について知るには、その死後四世紀余を遡る者かいた

Jeromeの著「紀元前九五年に生れ、娼蕪を用いた結果発狂し、平静期に数篇の作品も著し（そのうち作品は後にキケロが修正）、四十四歳の時自殺した」といふ短い記事による外ないが、之は後年エピキュリアニズムの敵として虚構として信用されてゐない。

彼がその詩の中に異常な鮮明さをもつて夢や幻から受けた印象を敘する事を繰り返し、又、夢の中で追探究し詩作すると述べてゐる精神の不断的緊張が推察される点などから、彼の発狂自殺も根拠のない説ではないと考へられるが、さうやうに力強く、思想に一貫性をもつた作品が狂人の平静期に書かれたとは思へない。後

彼の詩第一書は整然と書かれてゐるが、第二書以下は乱雑で、條々詩の作者の最後の放言と見ておこなふ事が容せられる。

純粹のローマ人であらうし、或は貴族のおとも考へられる。当時のローマ貴族は徳と支配力もたつてあつたが、教養高く、ルクレチウスの若年の頃は支配階級の人々間には哲字愛好

ルクレチウス 2

の詩がひろまり、エピキュロス学派の著したギリヤ人教師達がローマに定住し彼等と親しく交つてゐた。

生涯について知られるところは乏しいが、彼の個性は著しく鮮やかにその詩に印せられてゐる。理想も悟も堅く、世に無関心にならなく、第三書第三書には、青年時代目撃した暴力政治や、晩年にローマも支配した専制村状態の前に畏縮せず、やうやく感も易い心が見えよ。又、若い時代には社交にも無縁ではなく、豪奢な都会生活や大規模金の呼びかけや軍や軍隊行進やに親しむ人々の様子が詩にあらはれてゐる。近代人の様に山に登りその孤独の境にまよふ事もないが、直達の道に言及し、又田舎の倉庫の魅力を敘する筆にはやさしい社交性もあらはれてゐる。深い概念の印象も興へる点で、彼の作品は他の如く何人にもあらない。

多くの書物を讀んでゐる事が、その作品にあらうと察せられる。第一に Epiculus、同様に Empedocles の外に Democritus, Anaxagoras, Heraclitus, Plato 及び、多くの哲学者達の著作もよくよく一應は知つてゐた。その他のギリヤの散文作家には

——帝國主義研究——  
 略歴 明六社 東大法律部  
 著者 現職 東大經濟學教授  
 南洋島嶼の研究  
 帝國主義研究  
 日本の傳を疑ふ者

——帝國主義研究——  
 略歴 明六社 東大法律部  
 著者 現職 東大經濟學教授  
 南洋島嶼の研究  
 帝國主義研究  
 日本の傳を疑ふ者

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
 昭和二十四年六月一日 第二刷發行  
 定價二百五十圓  
 著者 矢野龍一 內田忠雄  
 發行所 東京都千代田區神田保町三ノ二  
 增永要吉  
 印刷者 東京都千代田區九段二丁目一  
 保科清春  
 白晝書院  
 電話九段四三五八番

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
 昭和二十四年六月一日 第二刷發行  
 定價二百五十圓  
 著者 矢野龍一 內田忠雄  
 發行所 東京都千代田區神田保町三ノ二  
 增永要吉  
 印刷者 東京都千代田區九段二丁目一  
 保科清春  
 白晝書院  
 電話九段四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・桂川製本

挿入文書

ルクレチウス 3

Thucydides と Hippocrates. 詩人では Homer を讃美し、  
数々處で模してゐる。次いで Euripides. ローマの詩人では Ennius も慕ひ、その言葉やリズムや作風を幾度かまねてゐる。悲劇作者 Pacuvius や同劇作者 Lucilius にも真うと云ふことがあつた。種々な氣質と思慮に於て羨むを感して古來の作家にひまつけた。

彼の詩は キリシテ語 Περὶ φύσεως を訳して De Rerum Natura と題し、すなはち詩人且自然科学者としてこの エンペドクレスをモデルとした。韻文の論理的哲字体系を著し、獨創的思想家としてエンペドクレスに劣るにやま。詩人としては恐らくはるかに偉大な天才を示してゐる。しかし彼が尊んだものは道徳的要素で、ピタゴラスの詩人と異り、教師且改革家であつた。

この詩の目標は人の心から神々及び死後の状態に關する恐れを一掃する事である。その為第一二書に於ては、世界が元來よく似た原因によつて支配されるものとして、無數の元々の無限の動と結合とによつて維持される事を説き、第三書ではこの原理を適用して、靈魂、肉體と共に滅びる事を示す。第四書では 運命 に関するエピクレス派の説を論じ、第五書は、地、海、空、

ルクレチウス 4

日と月と星の形成、生命の起源と人類の發達を説明すると稱し、第六書は雷雨、火山、地震等超自然的恐怖の因となり易まつもの説明に宛てられてゐる。この詩は、意味とや、題材の詩的扱ひのそれはさうや、独断的前提や、その前提と具體的現象との結合の完全な失敗や、独断的謬見によつて讀者に不満を感させると、同時に彼の演繹的歸納的推理力、論理の巧みと豊饒と、觀察の鋭さ、内容の充實、及び科学的解説における一貫した力や、今までの明確さによつて常に感銘を興へる。

第一、二書は、今尚科学的探求を要する如き大陸且正當な假説を生む能力を示し、第三、四書は心理分析の鋭さを記し、第四、六書は自然現象の最も活潑な觀察、第五書は、社會の起源と人類の文明化を考察する際の、獨創的な眼識と堅固な常識を示してゐる。しかし思想家としての彼の主要価値は、觀念の確乎たる把握と、人生及自然の解明に對するその適用にある。すなはち現象は一つの大きな有機的統一體として固結して觀察するに、自然の本性 (natura daedala rerum) がある。

彼の無神論者、且快樂主義を説く者と見做した従来の一般說理事實に堪へるものはない。殘酷の限らば、氣まぐしい女神の働も否定し、秩序ある、すべからざる、神の力も想像認識する態度に近づけても、近代の神教への接近の見方から、ルクレチウスの無神論を論ずるには、右時代の神論者の多數よりも、對深く敬

帝國主義研究  
——  
略歴 明二生 東大法政學部 卒業  
現職 東京經濟學部教授  
著者 植民及殖民政策  
南洋群島の研究  
帝國主義研究  
日本の偽善と著者

會員證號 A 208005

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
昭和二十四年六月一日 第二刷發行  
定價二百五十圓  
著者 矢内互 忠雄  
發行所 增永 要吉  
東京都千代田區神田保町三ノ二  
印刷者 保科 清春  
東京都千代田區九段二丁目一  
會社式 白日書院  
東京都千代田區  
神田保町三ノ二  
電話九段四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・柱川製本

帝國主義研究  
——  
略歴 明二生 東大法政學部 卒業  
現職 東京經濟學部教授  
著者 植民及殖民政策  
南洋群島の研究  
帝國主義研究  
日本の偽善と著者

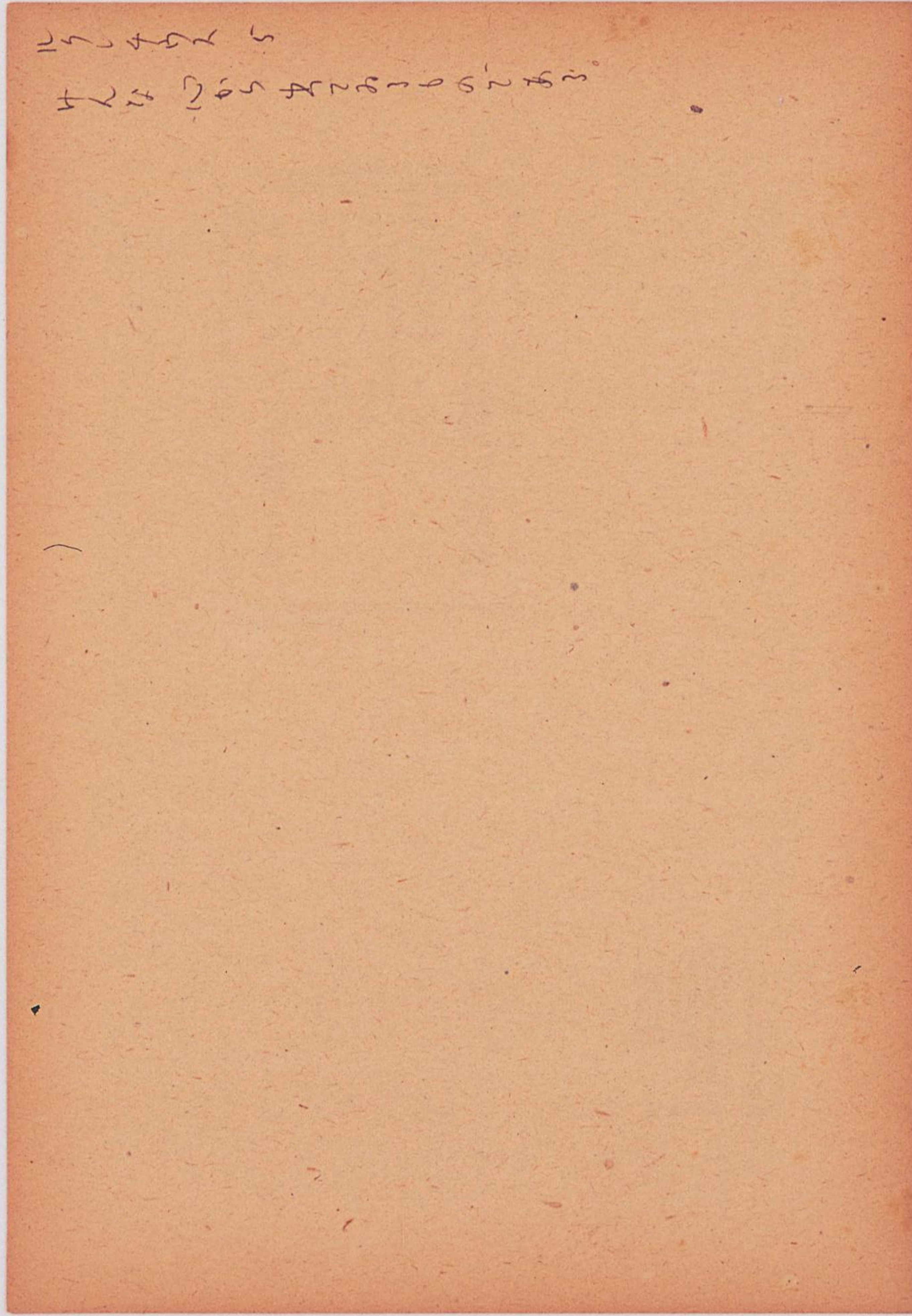
會員證號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
昭和二十四年六月一日 第二刷發行  
定價二百五十圓  
著者 矢内互 忠雄  
發行所 增永 要吉  
東京都千代田區神田保町三ノ二  
印刷者 保科 清春  
東京都千代田區九段二丁目一  
會社式 白日書院  
東京都千代田區  
神田保町三ノ二  
電話九段四三五八番

日本印刷工業株式會社印刷・柱川製本

插入文書





挿入文書

帝國主義研究  
——  
歷 明二六生 東大政治學部平  
理 順 東大經濟學部教授  
略 著 植民及殖民政策  
著 南洋群島の研究  
帝國主義研究  
日本の地位を論ずる

會員編號 A 208006

昭和二十三年四月一日 第一刷發行  
昭和二十四年六月二日 第二刷發行  
定價二百五十圓  
著 者 矢内原忠雄  
發行者 東京千代田區神田區三ノ二  
增 永 要 吉  
印刷者 東京千代田區九段二丁目一  
保 科 清 泰  
發行人 白 日 書 院  
東京千代田區三ノ二  
電話九百四三五六番

日本印刷工業株式會社印刷・柱川製本

挿入文書

・ 純粹のローマ人であつたらしく、彼が Ennius, Virgil, Horace 等と違つて、ローマの偉大や榮光を主題にしないのは、それらに慣れて珍しくなかつた爲かも知れない。貴族の女とも考へられる。当時のローマ貴族は virtue と governing qualities を失つてあつた。教養高く、彼の若年の頃は支配階級の人々の間には a new taste for philosophy がひろまり、Epicurean sect の若くは Greek teachers の Rome に定住して彼等と親しく交つてゐた。

生涯について知れるところは乏しいが、彼の個性は、著しく鮮やかにその詩に印せられてゐる。理想生活を選んだのは、世に無関心な爲でも冷静な性質の故でもない。第二書、第三書には、青年時代目撃した暴力政治や、晩年に Rome を支配した無政府状態の前に畏縮する a humane and sensitive spirit が見出される。若い時代には social life にも無縁ではなく、豪華な city life や、public games の叫び物や華やかな軍隊行進やに親しんだ様子が詩にあらはれてゐる。naturalist の鋭い観察力と poet の contemplative vision を働かせつゝ、多くの時を戶外で過したらしく、近代人の如く山に登りその孤独の境にさまよふ事をたのしんだ。しかし道途の連綿に言及し、又田舎の食事の魅力を叙する等には、やさしい社交性がある。深い sincerity の印象を與へる点で彼の作は如何なる作品

多くの書を読んでゐる事からその作品によつて察せられる。第一に Epicurus。同時に Empedocles の philosophical poem にも親しみ、Democritus, Anaxagoras, Heraclitus, Plato 及び Stoical writers の作をも少くとも一應は知つてゐた。その他のギリヤ散文作家では Thucydides と Hippocrates。詩人では Homer を讃美し、數箇處で模してゐる。次いで Euripides。ローマの詩人では Ennius を慕ひ、その language や rhythm や manner を幾度かまねてゐる。the old tragedian Pacuvius や the satirist Lucilius にも見うところがあつた。masculine temperament と understanding に於て類似を感じて、older writers に近づつた。

彼の詩は、韻文で書かれた a reasoned system of philosophy である。De Rerum Natura といふ題は Gr. περί φύσεως の訳で、artistic といふより speculative motive を重んじてゐる様に思はれる。すぐれた poet 且 physicist としての Empedocles を model として、詩に personal address の形を用ひ、筋を systematically に展開し、又最も dry 且 abstruse な topics に対しても、叙事詩の sustained impetus を通用した。兩者の expression にともなふ idea にともなふ tone にともなふ幾多の共通点がある。独創的思想家としては Empedocles に劣るにせよ、Lucretius は poet としては恐らくはるかに偉大である。彼の speculative ideas と moral teaching と poetical power とは互に相依つて彼の詩を力強いものにしてゐる。その中彼自身が重んじたのは、ethical な要素で、この点彼はギリヤ詩人と異なり、teacher 且 reformer であつた。彼の詩の主な idea は、the truth of the laws of nature と the falsehood of the old superstitions の相容れる余地なき対立で、人生の幸福と尊嚴は、前者と相容れ、後者と拒否するところに在るとする。彼は Epicurean system of philosophy によつてこの解放の戦を最も有効になし得ると信じた。

この詩の目標は人の心から、神々及び死後の状態に關する fear を取り除く事である。その爲第一、二書に於ては、世界の capricious agency によつて支配されるものでなく、無数の elemental atoms の無限の動きと結合によつて維持される事を説き、第三書ではこの原理を適用して、靈魂が肉体と共に滅びる事を示す。第四書では、images に關する Epicurean doctrine を論じ、第五書は、地と海と空、日と月と星の形成、生命の起源と人類の發達を説明すると稱し、第六書は、雷雨、火山、地震等超自然的恐怖の因となり易きもの、説明に宛てられてゐる。

この詩は、無味きや、topics の詩的扱ひの乏しさや、独断的前提や、その前提と具體的現象との結合の完全な失敗や、独断的謬見によつて讀者に不満を感じさせるが、同時に彼の濃渾の歸納的推理力、

英雄の巧みと豊かさ、観察のすばらしさ、内容の充實、及び科学的解説に  
おける consecutive force やスタイルの明確さによって常に感銘を興へる。  
第一、二書は、今尚科学的探求を要する大膽且正当な假説を呈し能力  
を示し、第三、四書は心理分析の鋭さを証し、第四、六書は自然現象  
の最も活潑多様な観察、第五書は、社会の起源と人類の文明化を考  
察する際の original insight と strong common sense を示して  
ゐる。Lol thinker としての彼の<sup>價</sup>値は、speculative ideas の確乎  
たる把握と、human life and nature の解釈に於けるその適用に  
ある。すべての現象は一つの great organic whole との因縁に於て觀察  
され、それを彼は "Natura daedala rerum" の名で acknowledge  
し、その most beneficent manifestations と the "Alma Venus"  
の中に symbolize して、詩の中で呼ばれてゐる。

彼は無神論者、且 doctrine of pleasure を説く者と見做した従  
来の一般説程眞實に遠いものばかり、残酷な、限られた、氣まぐれ  
な神々の働きを否定し、秩序あり、すべてを充しすべてを律する力を想  
像認識する態度には、少くとも近代の theism への接近が見出される。  
the supposed "atheism" of Lucretius は、各時代の所謂信者の多  
数よりも更に deeply reverential な spirit から出ている。(E. B.)

